

『五山百絶』注釈

山口 旬

本稿は、江戸後期に清新性霊派の詩風を唱道した江湖詩社の四才、市河寛齋・柏木如亭・菊池五山・大窪詩佛の絶句各百首を収めた『今四家絶句』（文化十二年刊）のうち「五山百絶」に翻字、注釈を加えたものである。底本として『詞華集 日本漢詩』（汲古書院）の影印を用いた。

五山先生百絶

秦里居士 細庵外史 詩禪道人 同輯

○秦里居士 細庵外史 詩禪道人 北原秦里、宮澤細庵、梁川星巖
江湖詩社の四才に次ぐ若手詩人。

1 宿山邨二絶 山邨に宿す 二絶

四山堆雪玉玲瓏 四山 雪 堆くして 玉 玲瓏
月落荒邨夜色空 月落て 荒邨 夜色 空し
炬火隔溪紅一綫 炬火 溪を隔てて 紅 一綫

已知獵手到寒熊 已に知る 獵手の寒熊に到るを

山村に泊まる 絶句二首

四方の山には雪が堆く積もり、玉のように輝いている。そして月は落ちて僻村の夜の景色は何も見えなくなつた。（その真つ暗な中）篝火が谷川を隔てた向こうに一筋、紅に光る。それで、獵師が冬の熊に迫つたのがわかつた。

○山邨 奥州の旅の途中か。5〜8番詩の奥州、南部への旅と一連の詩か。○玉玲瓏 玉は、宝玉。玲瓏は、宝玉のように冷たくさえてかがやくこと。○炬火隔溪紅一綫 綫は、いと、すじ。「一綫

炊煙隔溪起」（佐羽淡齋・晩秋足尾山中・『五山堂詩話』巻二）○已知 知ると言うことが起きた、の意。○獵手 獵師。師は平声、手は仄声で使い分けた。○寒熊 冬の熊。冬眠中の熊。○上平声一東（瓏、空、熊）

2 その2

老芋嫩葱只是腴 老芋 嫩葱 只だ是れ腴
 邨姑作食慣寒粗 邨姑 食を作て 寒粗に慣る
 和成骨董羹初熟 和して 骨董と成して 羹 初て熟す
 客亦知茲風味無 客も亦た茲の風味を知るや無や

熟し切った芋も若い葱も、ただひたすら肥えている。村の女は質素な食事を作るのに慣れていて、全て混ぜてごった煮にして、あつものがやつとできあがる。旅人にもまたこの風味がわかるかどうか。

○腴 地味(土地の具合)がゆたかで肥えている。ただこれだけがご馳走だ、のニュアンスか。○寒粗 質素。素朴。寒村と同じ言い方。○骨董羹 魚肉・野菜などをごたごたと入れて煮た汁。ごった煮。○茲 此と同じく近称指示語。茲は平声、此は仄声。
 ◎『文政十七家絶句』にも収録される。上平声七虞。

3 聞勢人有訛傳余死者戲作二絶寄示

勢人、余が死を訛傳する者有りと聞て戲に二絶を作て寄示す。
 抛却浮名正是閑 浮名を抛却して正に是れ閑なり
 只消盃酒洗愁顔 只だ盃酒を消て愁顔を洗ふのみ
 人間今尚爾遊戲 人間 今尚ほ爾く遊戲す
 未許端明歸道山 未だ許さず 端明 道山に歸るを

伊勢の人で、私の死を誤って伝える者がいると聞て戯れに絶句二首を作て送り示した。

虚名をすっかり投げ捨ててしまつて、まさに心静かだ。ただ、盃に酒を酌んで、愁顔を洗っている。世間で今なおそんな具合に戯れているので、いまだに端明学士の蘇軾と同じように、道山に歸る、つまりは死ぬなどということは許されないのだ。

○消盃酒 酒を飲む。○人間今尚爾遊戲 「間」は冒韻だが引用なので動かせない。『世説新語補』の「今尚爾遊戲人間」を語順を替えて使っている。○端明 端明学士。官名。翰林学士の上位。○歸道山 「道家で死ぬこと。蘇軾が惠州に貶謫され、後に都に歸つてきた時、葉祖洽は蘇軾に「世伝端明已歸道山、今尚爾遊戲人間」と問うた(世説新語補・排調下)。(古典文学大系本『五山堂詩話』注。『五山堂詩話』卷三7話にも死ぬことを「道山に歸す」の語がある。(『詩壇ジャーナリズム』)

◎『五山堂詩話』卷一23話にこの二首載せる。異同あり。「正」↓「好」

4 その2

歴盡畏途心鏤磨 畏途を歴尽して 心 鏤磨す
 對人不説奈窮何 人に対して 説かず 窮を奈何せん
 往逢陰吏猶知早 往て 陰吏に逢ふ 猶ほ早きを知る

三百瓮齋祿料多

三百の瓮齋おうせ 祿料 多し

険しい道を経尽くして、心は解けすり減ってしまった。人に対して、貧乏をどうしようなどと説くことはない。冥土に行つて、役人に逢つてまだ死期には早いのを知った。(彼の言う生きるのに必要な) 三百の甕の漬物よりは、食い扶持は多くあるのだ。

○畏途 けわしい道。「畏途巉岩不可攀」(蜀道難・李白)。險阻で畏るべき道路。おそろしく気味の悪い道。 ○陰吏 冥土の役人。

○往逢陰吏猶知早、三百瓮齋祿料多 瓮は、もたい。かめ。みか。

齋は、なます。あえもの。「三百の甕に入つた漬物。昔、貧士が死んで冥土の役人に会つた時、冥土の役人は、その土に「当再生、汝有三百甕齋消未尽」と言つたという(撰書堂詩話)「三百甕齋消未尽」(病癒・陸游) (古典文学大系『五山堂詩話』注)

◎下平声五歌

5 奥州道中

高低路向亂山東 高低 路は向ふ 乱山の東
身落荒陬蠻語中 身は落つ 荒陬 蛮語の中
只有不言桃李在 只だ不言桃李の在る有て
吹薰盡日馬頭風 吹き薰ず 尽日 馬頭の風

路は高山低山と様々な山の東へと向つていて、わが身は僻村の田舎言葉の中に落ちたようだ。ただ桃や李だけが、ものも言わず、日の出ている間ずっと風が、馬上の私を吹き薫らしてくれる。

○奥州道中 『五山堂詩話』卷二・八話の文化四年の旅「今歳、丁卯、余、奥中に遊ぶ」。次詩の南部への旅先の詩に続く一連の作。 ○高低路向 大窪詩佛の「下居集」58詩に「乱山高下中」(送那可公雅婦秋田)の句がある。 ○亂山 高さが不ぞろいの多くの山々。高低と対応。 ○東 韻字なので東としたか。 ○荒陬 すみ、くま。村落。せせこましい田舎村。 ○蠻語 『五山堂詩話』二・八「元の范德機の詩に、蠻語 人に酬ゆ 翻て自ら苦しむ。好山 敢て何の州ぞと問はず」 ○在 『五山堂詩話』卷二では、「在」を「妙」とする。 ○不言桃李 「桃李不言、下自成蹊」(史記・李広將軍) 蠻語と対応。 ○盡日 日の出から日の入りまで。 ○馬頭 馬上。 ◎上平声一東。

6 山中秋夜 以下三首南部客中作

團欒燒栗坐爐頭 團欒 栗を焼て炉頭に坐す
一椀松肪夜更幽 一椀の松肪 夜 更に幽なり
且使邨人謾說鬼 且らく邨人をして謾に鬼を説かしむ
匹如坡老在黃州 匹如す 坡老の黃州に在るに

栗を焼て、囲炉裏端にまどいして、椀に入れた松の油の灯りがひとつ、夜はひたすらひっそりとしている。しばらく村人に好きなように幽霊の話しをさせる。蘇東坡老が黄州に流された時にそっくりだ。

○南部 旧南部領。青森・岩手・秋田三県にまたがる。特に盛岡をいう。「五山堂詩話」541に、「余、向、在南部」とある。○團樂 まるく輪を作つてあつまること。親しい者の楽しい会合。○松肪 松

肪は、まつやに。松脂。「石乳無時滴、松肪徹夜明」(山中詩・陸游)。「松肪寄一車、可以照讀書」(冬夜・陸游)。この場合、いわゆる松明ではなく、椀に油を入れて灯芯をひたした灯り。○夜更幽 「一鳥

不啼山更幽」(北宋・王安石・鍾山) ○且使邨人謾說鬼 蘇軾の詩に「鬼」は多くあるが、黄州で村人と鬼を語つた詩は見あたらない。

○匹如 似ること。匹似に同じ。「匹」はたぐい、たぐう、の意。如は、状態をあらわす形容詞に付くことば。然。申申如(論語)など。

○坡老在黄州 「黄州」蘇東坡、中年期の黄州への流罪の日々。○下平声十一尤

7 新春二絶句 窮郷作客喜逢春 窮郷 客と作て 春に逢ふを喜ぶ 情味今年比例親 情味 今年 例に比すれば親し 我不肯留君豈久 我 肯て留らず 君 豈に久しからんや

江山他日共歸人 江山 他日 共に帰るの人

都から離れたこの土地で、旅人として、春に逢つたのを喜んで(春の)心持ちは、今年は普段に比べると親しげに感じる。私もかつてここに留まることもないし、君(春)もどうして久しく留まる

ことがあろうか。もう少ししたら、いっしょに山や川を帰っていく同志なのだ。

○窮郷 僻遠の地。○今年比例親 「例」旅先でないのと比べて。○君 春のこと。○江山 川と山。そのけしき。○他日 過去も未来も表すがここは将来。

◎上平声十一真。36詩が類想。

8 その2 澗戸重陰冰雪堆 澗戸 重陰 氷雪 堆し 客懷猶未覺春回 客懷 猶ほ未だ春の回るを覚えす 梅花嚙口非無意 梅花 口を嚙す 意無きに非ず 要待歸時饑我開 歸時を待て我を饑して開んと要す

谷間の家では、木陰も深く氷や雪が堆く残っていて、旅人の気持ちでは、なおまだ春が回ってきたのを感じない。梅の花が口を鎖しているのは、考えがあつてのことで、私の帰る時期まで待つて私

を餞するはなむけように開こうとしているのだ。

○潤戸 谷間にある家。「潤戸寂無人」(辛夷塢・王維) ○重陰 木の葉などが重なりあつて、うす暗くなつた、物の陰。○客懷「懷」は、思い、心。○梅花噤口 花の咲くのを笑うとも言うので言う。

○非無意 前詩の「親」から。
◎上平声十灰

9 移竹

我正醒時君正醉 我 正に醒る時 君 正に酔ふ
扶君移向小欄西 君を扶け 移して小欄の西に向ふ
他時我醉君須醒 他時 我 酔て 君 須らく醒むべし
一臥清風要借棲 一臥 清風 棲を借りんと要す

私がかまきに醒めている時に、君はまさに酔っている。そこで、君を支えて、小さな欄干の西に移し植える。将来、私が酔っている時に、君には醒めてもらおう。清らかな風が吹く中、ひと眠りするの
に竹林の中に宿を借りようと思つているから。

○我正醒時君正醉 「竹醉日」陰曆五月十三日の称。この日に竹を植えるるとよく繁茂するという。そこから「酔く醒」と発想。「君」は竹の別称「此君」から(晋の王徽之が竹を指して、「何ぞ一日も此君無かるべけん」といったことから。「晋書・王徽之」)「醉」の字は仄

字で踏み落としている。○扶君移向小欄西 向は於いての意とする。「小欄の西に移す」となるが、訓読は原本訓点のままとした。

○他時 他日と同じく過去も未来も表すがここは将来。○一臥清風要借棲 「要」は、待ち受ける。

◎上平声八齊、酔は踏み落とし。前対格の時は正格となる。「文政十七家絶句」にも収録される。「棲」を「栖」とする。

10 夏日雜陸 原五

願得呉鉤劍似冰 願くは呉鉤劍の氷に似るを得て
讒人先斬歐陽憎 讒人 先づ斬る 歐陽の憎むを
直教座側長清盡 直に座側をして長に清尽せしめ
一榻薰風試曲肱 一榻の薰風 曲肱を試みん

願わくは、水のごとく鋭い呉鉤劍とやらを手に入れて、真つ先に、歐陽脩が憎んだという讒言やかましい輩の蠅を斬つてしまいたいものだ。そしてすぐに、座の側をずつと清らかにし尽くして、初夏の風に吹かれて、長椅子に寝そべって肘枕でも試してみようというわけだ。

○呉鉤 刀劍の名。湾形の刀。○讒人 讒言する人。「憎蒼蠅賦」(歐陽脩)に「頃刻にして集まる、誰か相告報するや。」耳元で羽音のうるさい蠅を指す。○歐陽憎 「憎蒼蠅賦」(歐陽脩「古文真宝」など)

から蠅を指す。 ○曲肱 貧しいながらも道を行く楽しみ。簡素な生活の楽しさ。孔子の弟子の顔回が、ひじをまげてまくらとしたことから。「飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。」(論語・述而)
◎下平声十蒸 詩題の「夏日雜吟」は范成大の「四時田園雜興」連作の影響下であることをしめす。67詩に「冬日田園雜興」。

11 薄暮驟雨

薄暮狂雲挾雨過 薄暮の狂雲 雨を挟みて過ぎ
殘聲猶自在汀荷 殘聲 猶自ほ 汀荷に在り
紅燈無數涼如滴 紅灯 無數 涼 滴るが如く
近水樓臺氣色多 水に近き樓台 氣色 多し

夕暮れの定まらない雲は、まるで雨を挟んで運ぶようにして通り過ぎていったが、そのあとまだまだ汀の蓮の葉の滴る音が雨音のように残っている。雨に洗われた花街の紅い灯は数え切れないぐらいで、涼しげで滴るようだ。水辺に近い樓台は、見所がたくさんある。

○薄暮 日ぐれになること。夕ぐれ。「乱雲低薄暮 急雪舞廻風」(対雪・杜甫) ○狂雲 乱れさわぐ雲。所さだまらぬ雲。 ○猶自「本自独自各自手自猶自徒自只自信自空自亦自也自偏自要自ノ類ミナ上ノ字ニツヒテ用ユ」(詩家推敲) ○紅燈 紅灯緑酒。紅い灯のついている街と緑色の酒、転じて狹斜花街のさま。書齋の青灯と対す。

○近水樓臺 具体的には不忍池周辺などか。 ○氣色 ありさま。ようす。

◎下平声五歌

12 白河醫員小澤再成來索其侯五十壽詩輒賦一絶以附輿誦

(白河の医員、小沢再成、来て其の侯五十の寿詩を索む。輒すなわ賦一絶を賦して以て輿誦に附す。)

○輒 輒の俗字。「輒」くしてすぐに。 ○白河 福島県南部の市。もと阿部氏十萬石の城下町。 ○輿誦 多くの人の言。身分の低い人の言。駕籠かきの言葉のような蔑称か。

◎五山は壽詩に否定的。『五山堂詩話』卷一52話

君自今時錢若水 君 自ら今時の錢若水
急流勇退更無倫 急流 勇退 更に倫無し
玄風道骨何須問 玄風 道骨 何んぞ問ふことを須ん
便是神仙班裏人 便是是れ神仙班裏の人

貴方は現代の錢若水のようだ。彼のごとく急流の中から勇退するようになつぱりと官を辞し去られたのは、他に比べようもない。道者や仙人のような氣質は、わざわざ問うまでもない。それだけでそのまま、神仙の仲間の人なのだ。

○君自「君自我自ノ類ハ則ノ義ニ近シ」（『詩家推敲』）○錢若水「宋・新安の人。字は澹、臣、長卿。謚は宣靖。官は并代経略使。（宋史、二百六十六）四十四歳で没。○急流勇退 きっぱりと官を辞し去るたとえ。「一僧謂錢若水曰、公急流勇退人」（『名臣言行録』）。

○玄風道骨何須問 玄風は、老莊の道。深遠な道。道骨は、「修道者の氣質」、道骨仙風は、「謂有得道者及仙人的氣質神采」（漢語大詞典）。通常は道骨仙風で熟しているのを玄風道骨と語順を変え、結句との同字を避けて仙を玄とした。

◎上平声十一眞、水は仄声で踏み落とし。

13 七月十一日飲百香齋晚間驟雨雨不傷月即席走筆得四絶句

（七月十一日、百香齋に飲む。晚間、驟雨。雨、月を傷らず。即席、筆を走せて、四絶句を得たり。）

快風顛雨池上寒 快風 顛雨 池上に寒し
荷珠跳散不成團 荷珠 跳散して 団を成さず
姮娥欲覩此奇景 姮娥 此の奇景を覩はんと欲して
半捲雲帷偷眼看 半捲雲帷を捲て 偷眼して看る

七月十一日、百香齋で飲んだ。夕方に、俄雨となったが、雨が月を隠さなかった。即席に、筆を走らして、四絶句を得た。

快よい風が吹いて激しい雨が、池の辺りや水面に寒々と降って

る。蓮の葉の上の水滴は勢いよく飛び散ってかたまりに成る間もない。月の女神、姮娥は、この珍しく美しい風景をのぞき見ようとして、半分ほど雲の帷りを巻き上げて盗み見している。

○七月十一日 何年か不明。○百香齋 未詳。○晚間 夕方、晩。○雨不傷月 雨が降ったのに月が隠れなかったということ。夜の天気雨。○姮娥欲覩此奇景 姮娥は、漢の文帝の名が恒であるにより漢人は姮娥を改めて嫦娥とした。古代、伝説上の美人。弓の名人の夫が西王母からもらってきた不死の薬を盗んで飲み、月に逃げたという。常娥・月精・素娥とも。覩は、覩（ソ。うかがう）の俗字。

◎上平声十四寒

14 その2

雲痕應讓月痕清 雲痕は応に月痕の清に譲るべし
北畔滂沱南畔晴 北畔は滂沱 南畔は晴る
織就雨絲無覓處 織り就す 雨糸 覓むるに処無し
縹紗池面却分明 縹紗池面 却て分明

雲の影は月の影の清らかさに一步を譲ったのだろう。北側は滂沱として降り、南側は晴れている。雨の糸は織物をつむいでいるのだが、取ろうとしてもとれない。それなのに、池の面には、ちぢみのよう

な織物が月の光に映じて逆にはつきりと見える。

○織就「就」「成ニ同シ」(『詩家推敲』) ○縹紗 細かいしわのある絹織物。古の穀(チヂミ)。

◎下平声八庚

15 その3

雨師心匠亦何工 雨師の心匠 亦た何んぞ工なる

嵌月亂雲装太空 月を乱雲に嵌して太空を装はふ

洗出清輝元徹底 清輝を洗出して 元と徹底

輕埃隔得便朦朧 輕埃 隔て得て 便ち朦朧

雨の神様の工夫は、なんと巧みなのだろうか。月を乱れた雲の中に嵌めこんで、太空を装ってしまった。月の清らかな輝きを洗い出して、より徹底して見せて、小さな埃ひとつでも見せずに、他は朦朧と隔ててしまった。

○雨師 雨の神。 ○心匠 こころに思いめぐらす。心中にたくらむ。

工夫する。かんがえ。工夫。 ○亦何工 上が匠なので縁語的に工

といった。 ○嵌月亂雲装太空 嵌は、はめる。太空は、太空のこと。

月以外を雲でおおうことで余計な埃を朦朧と隠し、より月の美しさを出した。

◎上平声一東

16 その4

雨中月色月中雨 雨中の月色 月中の雨

此景尋常縁底看 此の景 尋常 底に縁て看ん

起舞狂顛持不得 起舞 狂顛 持し得ず

我和荷葉一齊歡 我 荷葉と一齊に歡ず

雨の中の月景色、月景色の中の雨。こうした風景は、普通では何よって見ることができようか。狂喜乱舞して、じっとしてられない。私は蓮の葉が揺れるのといっしょによるこび興じている。

○月色 月の景色。 ○底 唐・宋の俗語。何と同じ。「病骨独能

在 人間底事無」(李賀・示弟) ○起舞 たって舞う。よろこんで

奮発する。一首目に快風とあるので、荷葉がゆれている様子。 ○

持 支える。 ○和「和」(中略) : 與の義に用ゆ。」(詩家推敲)

○歡 よろこぶ。楽しむ。

◎上平声十四寒、雨は仄声で踏み落とし。

17 木蘭花

出塞當年卸艷粧 出塞 當年 艷粧を卸す

化為花卉伍羣芳 化為花卉と為て 群芳に伍す

至今顔色嫌脂粉 今に至て 顔色 脂粉を嫌ふ
誰信木蘭是女郎 誰か信ぜん 木蘭 是 女郎なるを

故郷から出兵した当時、華やかな化粧は取り去って男装した。姿を変えて地味な草花となつて、多くの派手な花々に對抗したのだ。今に至るまで顔色の紅白粉を嫌つてあくまで清白だ。誰が信じるだろうか、この木蘭の花が実は女であつたなどと。

○木蘭花 木蘭は、木の名。モクレン科モクレン属の落葉低木。モクレン。また、古の孝女の名。木蘭の姓は「花」「木」「魏」など一定していないが、京劇では「花木蘭」とされる。また、楽府の名。木蘭という少女が男装して、父に代つて従軍し、無事帰還したことを歌つたもの。○出塞 国境から国外へ出る。「出塞詩」○卸艶粧「卸妆」装飾を取り去ること。妝は粧。○花卉 花の咲く草。草花。○脂粉 べにとおしろい。女の化粧。○木蘭是女郎「同行十二年。不知木蘭是女郎」(木蘭詩・古樂府「古詩源」)の句から。
◎下平声七陽

18 答人索櫻花詩(人の桜花の詩を索むるに答ふ。)
名花豈可着凡詞 名花 豈に凡詞を着くべけんや
祇足汚他絶代姿 祇だに他の絶代の姿を汚すに足るのみ
聖到少陵還自歎 聖 少陵に到るも 還た自ら歎らず

一生不作海棠詩 一生 作らず 海棠の詩

人が桜の花の詩を求めてきたのに答えた詩。

桜という名高い花に、どうして平凡な言葉を付けられるだろうか。そんなことをすればただ、あの絶世の姿を汚すだけのことだ。詩の境地の高きに昇つた詩聖・杜甫であっても、それだけに自分であきたらずに、一生涯、母の諱の海棠にふさわしい詩を作らなかつたというではないか。

○名花 後項の王十朋の詩に「名花」の語が見られる。○祇 つつしむ。うやまう。ただ。ひとすじに。ひたすら。祇は祇(地の神)とは別字。祇も祇と混同して「ただ」の意で用いられる。「唐詩概説」に「祇(ただ)」とある。「祇」は「ただ、まさに」で祇に通じる。祇は祇の俗字。○聖く少陵 詩聖、杜甫。字は子美。杜陵にいたので少陵野老などと自称した。○歎 食い足りない。ききん。すくない。意に満たない。心中に恨みを抱く。○一生不作海棠詩「少陵詩史有遺闕、海棠名花輒湮没」(郡圃無海棠買數根植之・王十朋)
◎杜甫が海棠の語を詩中に用いなかつたことについていくつかの説がある。一説に、「杜子美母名海棠 子美諱之、故杜集中絶無海棠詩。」(古今詩話)など。
◎上平声四支

19 告天子三首

野煙初暖散朝陰、野煙 初て暖にして 朝陰散ず
茶褐衣輕春已深、茶褐の衣 軽くして 春 已に深し
決起纒揚三四尺、決起 纒に揚る 三四尺
帶聲高上幾千尋、聲を帶て 高く上る 幾千尋

野のもやがやつと暖かく感じられるようになり、朝の雲も散り去った。雲雀の茶褐色の衣も軽やかで、春も既に深まった。急に立ち上がったと思うと、わずかに三四尺ほど飛び上がり、高い声で囀りながら、幾千尋もの高さを飛び上がっていく。

○告天子 鳥の名。雲雀の異名。叫天子とも。スズメ目ヒバリ科の小鳥。背面は黄褐色の地に黒褐色の斑がある。日本各地の畑地・草原などに巣をつくり、空中高くのぼってさえずる。高く飛び上がって天子に訴え告げるようなのから言う。 ○野煙 野に立つともや。
○散朝陰 朝陰は、朝の雲。「涼颯颯夕露、疏雨散朝陰。」(秋懐・孔天胤)、「疏雨」は、まばらに降る雨。野煙と朝陰は、もやと雲で区別したものか。 ○茶褐衣 「背面は黄褐色の地に黒褐色の斑」 ○決起 勢いよく急に立ち上がる。決然と立ち上がる。 ○幾千尋 「尋」長さの単位。尋は八尺で180センチメートル。常は十六尺。尋常で普通のこと。日本の一尋(ひろ)は六尺。182センチメートル。
◎下平声十二侵

20 その2

看看仰面眼將穿、看看として仰面すれば 眼 將に穿たんとす
午日薰人笠影圓、午日 人を薰じて 笠影 円なり
飛最高時乍相失、飛びて最も高き時 乍ち相失す
聲微杳在彩雲邊、聲 微に 杳として彩雲の辺に在り

空を仰いでじつとよく穴の空くほど雲雀を見ていると、昼の日射しは人をくすべるように熱く、高く真上からの光で雲雀を仰ぎ見ている人の笠の影はまん丸だ。飛び去って最も高いところに達した時、ふと見失ってしまう。声だけがかすかに、はるかかなたの美しい雲のあたりに聞こえる。

○看看 みるみるうちに。よく見えるさま。 ○仰面 顔をあげて上をむく。「仰面貪看鳥」(漫成二首・杜甫) ○午日 通常は陰暦五月五日の端午の日をさす。用例は少ないがここは昼間の太陽。 ○彩雲 美しい雲。「朝辞白帝彩雲間」(早發白帝城・李白)。
◎下平声一先
21 その3
回身容易下雲梯、身を回して 容易に雲梯を下る
叫罷天關日未低、叫び罷て 天關 日 未だ低れず
斜落麥畦無覓處、斜に麥畦に落て 覓むるに処無し

偶然認得菜花西 偶然 認め得たり 菜花の西

身をめぐらして簡単に雲からの梯子を下りてくる。天に告げる役を終えても、天の門がまだ閉じていないようで、日はまだ暮れていない。斜めに麦畑の畦に下りてくるが、探してもどこにいるのかわからず、たまたま菜の花の西のあたりに姿を認めた。

○雲梯 もとは城攻めの道具。雲に届くほどの高い梯子。 ○天闈 天帝の門衛。帝王の宮門。闈は、門番。宮門。ここでは天に告げる名を持つ告天子（ひばり）なのでいう。

◎上平声八齊

22 舟中書囑目（舟中、囑目を書す。）

沙際維舟罟夜魚 沙際 舟を維ぎて 夜魚を罟す
黄昏吹火上簔初 黄昏 火を吹て 簔に上す初
須臾如滴涵寒影 須臾に滴るが如く 寒影を涵す
紅串波心一丈餘 紅 波心に申す 一丈余

水際に舟を繋いで、夜の魚に網を打つ。黄昏時に、火を吹き付けて簔に火を点ける頃。すぐに、滴るように冷たい水面に火の影が映る。その紅色は、水の中央を一丈余りも貫いている。

○囑目 目をつけてよく見ること。 ○沙際 みぎわ ○罟 あみ。うおあみ。あみとる。あみする。 ○寒影 寒そうな影。冬の影。「寒影波上雲、秋声目前樹」（擬古詩・薛奇童） ○涵 ひたす。 ○串 つらぬく。 ○波心 波の真ん中。川や湖の中央部のこと。「月点波心一顆珠」（春題湖上・白居易） ○一丈 長さの単位。一丈は、一尺の十倍。周代では、一丈は二五センチメートル。近代の日本では、一丈は三〇三センチメートル。

◎上平声六魚

23 送島梅外遊北越（島梅外の北越に遊ぶを送る。）

二瘦多年賦北遊 二瘦 多年 北遊を賦す
山音水好總相酬 山は奇に水は好く 総て相酬ゆ
越州元與詩為地 越州 元と詩と地を為す
不遇島家何肯休 島家に遇はずんば何ぞ肯て休まん

瘦竹、瘦梅の二人は長年に渡って北の旅を材料に詩を賦してきた。山の景色、川の景色ともに好く、全ての景に既に詩人が作品で酬いている。越後はもともと詩を賦すのにふさわしい所だ。さらに島梅外にめぐり逢うまでは、何で詩の材料が尽きようか。

○島梅外 小島梅外（児島大梅）。一七七二〜一八四一。江戸時代後期の詩人、俳人。安永元年生まれ。市河寛齋らに師事、梅外と号し

て大窪詩仏らとならび称される詩人となる。のちに俳諧を学び、名をあげた。○二瘦 瘦竹(柏木如亭の別号)と瘦梅(大窪詩佛の別号)。二人は寛政四年(一七九二)頃に向島東江寺に二瘦詩社を開く。『詩聖堂詩話』42・43話に紹介記事がある。○多年賦北遊

この梅外の北遊は文化六年のそれとされる(『江戸詩歌論』p.593)。それ以前に、如亭は寛政六年に信州中野、寛政十二年から十三年に越後、文化二年に信越、詩佛は寛政三年に秋田、寛政八年に信州、享和二年に桐生、文化三年に信越、と北遊している。それらをふまえている。

○越州元與詩為地 越州と詩の關係は不明。当時の新潟は八百八後家などというように多くの娼妓をかかえた日本海沿岸きつての歓楽都市であった(『遊人の叙情』)ことをいうか。

○『今四家絶句』「寛齋百絶」に「送島梅外 手折垂楊那忍分、信山越海隔煙雲。遊踪經歲休留滯、不可江湖久欠君。」の詩を収める。

◎下平声十一尤

24 午睡起

高樹蟬聲喚夢歸	高樹	蟬聲	夢を喚び帰す
西窗影暗夕陽微	西窓	影 暗くして	夕陽 微なり
一身較重方纔覺	一身	較や重くして	方に纔 <small>さと</small> に覺る
護冷婢來加寢衣	冷を護して	婢 来りて	寢衣を加へしを

高い樹の上から蟬の声で夢から喚び返された。西日の当たる窓は

暗く、夕陽も微かに残るばかりだ。体がやや重く感じて、まさにやつと覺つたのは、婢が来て体が冷えないように、寢衣を掛けてくれたことだ。

○寢衣 寝るときに着る衣服。「必有寢衣」(論語・郷党)理想の君子の長い記述の一部。

◎上平声五微

25 墨菊

縞衣獨立瘦難勝	縞衣	獨立	瘦 勝へ難し
不願黄金塔結層	願はず	黄金の塔	層を結ぶことを
只向陶家来一笑	只だ陶家に向て来て	一笑す	
前身知是六朝僧	前身	知る是れ	六朝の僧

墨染めの衣の瘦せこけた姿で、しかもたった一輪では立つのにも耐えないが、けっして何重にも重ねた菊の細工などに加わるのは望みではない。ただ陶淵明の家にやつて来て一笑するように咲いたということは、その前身は有名な三笑の一人、六朝の僧・慧遠なのだとわかった。

○縞衣 くろい着物。僧の衣。転じて僧。「縞衣之宜兮」(詩経・鄭風・縞衣)ここは墨絵の菊なので墨染めの衣の僧侶に見立てていう。

○黄金塔 園芸の菊の会などの雛壇様のものを指すか。 ○陶家来

一笑く六朝僧 画題にもなっている「虎溪三笑」は、晋の僧慧遠が廬山の東林寺に隠居して虎溪を渡るまいと誓ったが、陶淵明・陸修静の二人の帰りを送って思わず虎溪を過ぎてしまい、三人ともに大笑したという故事。ここは、三笑のうちの一、の意。

◎『五山堂詩話』卷四19話に墨菊の佳詩二首（詩佛、榕齋）に続いて自らのこの詩を紹介している。

◎下平声十蒸

26 雪後尋梅 原三

雪晴村落幾籬笆 雪は晴る 村落 幾籬笆（いは）

只問梅花發處家 只だ問ふ 梅花発く処の家

急訪梅花自公事 急に梅花を訪ぬるは自ら公事

不須先酒後梅花 須らく酒を先に梅花を後にすべからず

雪も晴れて、村ざとの幾つもの竹編みの垣に、ただひたすら梅花の開く家を尋ね回る。急に梅花を訪ねるのは、もう自ら詩人の公務のようなものだ。当然、酒を先にして梅花を後にはいけない。

○籬笆 「用竹、葦或樹枝等編成、可作為障隔的柵欄。」（漢語大詞典）

◎下平声六麻

27 呂洞賓圖

衆生度盡願昇天 衆生 度し尽して 昇天を願ふ

呂祖此心真聖賢 呂祖 此の心 真に聖賢

上界人間同一揆 上界 人間 同じく一揆

方知遺世是頑仙 方を知る 世を遺るは是れ頑仙

衆生を濟度し尽くして、もう迷いのない世界だから昇天する必要はないのに、昇天を願っている。呂祖の、この心は、まことに聖賢の名にふさわしい。天上界も人間世界も同様のやり方であるのに、それでも世を捨てようというのは実に頑固な仙人だと、まさにわかった。

○呂洞賓 唐代の道士。中国の代表的な仙人である。八仙の一人で、単に呂祖とも呼ばれる。 ○衆生度 衆生濟度。 ○呂祖 呂洞賓のこと。 ○上界人間同一揆 「先聖後聖、其揆一也」（『孟子』離婁章句下）。揆ははかりごと。 ○頑仙 かたくなな仙人。

◎下平声一先

28 送淡山人

腰間括得一囊肥 腰間 括し得て 一囊 肥えたり

蕭散淵材今始歸 蕭散の淵材 今 始て歸る

李老松煤文老竹 李老の松煤 文老の竹

家人不敢認珠璣 家人は敢て珠璣を認めず

腰に、括った袋がひとつ豊かにふくらんでいる。静かな淵から持ってきた材料が、今始めて故郷へ帰る。李老が作った名墨、文老が描いた墨竹画の名品。家族にはけっしてその宝玉のような価値がわからないだろう。

○淡山人 牧忠輔。加賀金沢藩士。文化七年辞職。文化十年没。この詩は文化七年の辞職時のものか。○腰間 こしぎわ。○括 「括囊」袋などの口をしめくくる。○蕭散 しずかでひまなこと。さつぱりとわだかまりがないこと。淡山人の「淡」を言ったか。○淵 用例を探し得なかつた。○歸 帰る意か帰す意の両様にとれる。○李老松煤 李墨のこと。十世紀中国の名製墨家、李廷珪の製作した墨。○文老竹 北宋の画家、文与可の墨竹画。文与可は特に墨竹に長じていた。

◎「五山堂詩話」四34話に淡山人の為人が記される。

「牧淡山の書房に題する」に云ふ。

先生無竹亦何俗 先生 竹無くも亦た何ぞ俗ならん
種竹先生竒更竒 竹を種て 先生 奇 更に奇
醉後灑毫鳶鳳舞 醉後 毫を灑て 鸞鳳 舞ふ
満窓月影碎金時 満窓の月影 金を碎く時
淡山は蕙齋の僚友なり。名は忠輔、書画も亦た超なり。飄逸、酒を愛す。

常に一大骨董袋を帶ぶ。筆墨弓軸、悉く皆な収め入る。腰間、彭亨然、殆んど人をして失笑せしむ。其の國に歸る日、余、一絶を贈て云ふ。その後、この詩が紹介される。

◎上平声五微

29 牧牛絶澗圖

六七歸牛絶澗流 六七の歸牛 澗流を絶す

流清牛渴奈遲留 流 清く 牛 渴して 遲留を奈ん

牧童別取橋頭路 牧童 別に取る 橋頭の路

叱叱驅来不自由 叱叱 驅り来れども自由ならず

六七頭の歸りの牛が谷川の水を渡っている。流れは清く、牛はのどが渴いているので、牛が停まってぐずぐずしているのもどうしようもない。牧童のほうは、別に橋の上の道を取っていて、叱叱と牛を追ってみても、なかなか言うことをきかない。

○牧牛 放し飼いの牛。○絶澗 人里から遠く離れた谷。絶谷。○澗 たに。たにみず。谷川。○絶く流 流を横切つてまつすぐに渡る。○流く流 流の字を一句末と二句頭に重用した頂針法。○歸牛 牧草地から帰る牛。○遲留 とどまる。○橋頭 橋のほとり。橋のたもと。ここは橋の上。○叱叱 舌打ちの声。畜類を追う声。「原頭叱叱兩黃犢」(岳池農家詩・陸游)

◎下平声十一尤

30 吳剛斫桂圖(吳剛、桂を斫るの図。)

老桂陰繁翳兔精 老桂 陰 繁くして 兔精を翳おぼふ
仙斤日夜斫還生 仙斤 日夜 斫て還た生ず

吳剛辛苦無多念 吳剛の辛苦 多念無し

只為中秋一度明 只だ中秋一度の明の為なり

桂の枯木が、おおいに繁つて、その陰が兔の精の光をすっかり掩っている。仙界の斧で昼夜切つているがすぐまた生えてきてしまう。(切り続けている) 吳剛の苦労は他のことでもない。ただ中秋の一度の明月の為なのだ。

○吳剛 月に流され枝を切り続ける仙人。『酉陽雜俎』「天咫」などに見られる。○斫 うつ。切る。『斫桂刀』という語がある。○

老桂陰繁 月にある桂の木。『酉陽雜俎』「天咫」の吳剛と同じ部分に見られる。○翳 おおう。○兔精 月兔は、月の異名。「月中何有。白兔搗藥。」(『藝文類聚』傳咸擬天問) ○仙斤 斤は、おのまさかり。

◎下平声八庚

31 その2

斫盡香雲桂樹開 香雲を斫り尽くして 桂樹 開く

廣寒宮裏有餘材 廣寒宮裏 余材有り

乾薪多積應無地 乾薪 多く積て 応に地無かるべし

盍送人間一束來 盍なんぞ人間に一束を送り來らざる

香しく咲いた雲のような花を切り尽くしても、桂の花はまたすぐ開く。だから、月の宮殿、廣寒宮の中には材木がたくさん余っているだろう。乾かした薪をたくさん積んで、場所がないはずだ。なんで俗世間にその一束でも送つて來ないのだろう。

○香雲 花の咲いたさま。○桂樹開 樹が開く、のニュアンスが不明。開だけで花が咲く意があるとはいうが、上が花を切るとあるのでや矛盾か。○廣寒宮 月にあるという宮殿。廣寒府。月宮殿。○

盍 なんぞ云々せざる。何不(カフ)の合音字。盍(カフ)。
◎上平声十灰

32 江干初雪圖

黯淡江天雪正飛 黯淡たる江天 雪 正に飛ぶ

漁家一半掩柴扉 漁家 一半 柴扉を掩ふ

玻璃凝得頑如許 玻璃 凝り得て 頑 許の如し

豈可扁舟容易歸 豈に扁舟 容易に帰るべけんや

うす暗い川辺の空には、まさに雪が飛んでいる。漁師の家では柴の扉を半分掩っている。絵の中にガラスのように凝って、このように頑丈に固まってしまった。どうして小舟で抜け出て、容易に帰ることが出来ようか。

○江干 かわばた。江のふち。 ○一半 半分のうちの一つ。単に半分というのと同じ。 ○玻瓈 ガラス。 ○如許 画中の様子をさす。 ○歸 画中なので固定されて帰ることができない。 ○上平声五微

33 雙清圖

兩家風格怎平章 兩家の風格 怎いかでか平章せん
黃玉素瓊雙國香 黃玉 素瓊 双つながら國香
好把孤山林處士 好し 孤山の林處士を把て
一瓶配食水仙王 一瓶 配食せん 水仙王

両者の風趣や品格などどうして品評したりできようか。水仙の黄色の花と梅の白い花は国で最も美しい花ふたつだ。よし、孤山に隠居する梅好きの林連に対して、(梅とともに) 一瓶の水仙をも供えることにしよう。ちょうど孤山の南麓に水仙廟があるというのだから。

○雙清 ふたつながら清らか。 ○風格 人がら、風采、品格。
○怎 いかでか。なんで。どうして。 ○平章 公平に品評する。
○黃玉 黄色の佩玉。水仙花の異名。 ○素瓊 『詩韻含英』に載る。
○國香 国中で最もよい香を言う。蘭・梅など特定の花を指すこともあるが、こゝは水仙。 ○把 処置する対象を、取り上げて示すことば。「欲把西湖比西子」(飲湖上初晴後雨・蘇軾) ○孤山 浙江省杭県の西湖の中、後湖と外湖との間、孤嶼・瀛嶼ともいう。宋の處士・林連の隠棲したところ。 ○林處士 宋の詩人、林連。梅妻鶴子で知られるように梅を好んだ。 ○配食 他の神と合わせ祭つて供物をすすめる。 ○水仙 水中の仙人。呉子胥や屈原をさす。また、草の名。白花、葉は黄色。全部黄色の物もある。 ○一瓶配食水仙王 「不然配食水仙王」(書林連詩卷・蘇軾)、「一杯當屬水仙王(原注・湖上有水仙王廟)」(飲湖上初晴後雨二首其一・蘇軾)「水仙王」は水神。廟は孤山の南麓にあるという。

○下平声七陽

34 題仲景蓮所藏宣和硯 (仲景蓮の藏する所の宣和硯に題す。)

鴻鴈北飛空作賓 鴻鴈 北飛して 空しく賓と作る
安巢燕子幾青春 巢を安ずる燕子 幾く青春
石家學子真沈黙 石家の學子 真に沈黙
諳盡當年不語人 當年を諳んじ尽くして 人に語らず

雁は北へ使者として飛んでいって、来賓となったがその結果は空しいものであった。宋は使者を金に使わし遼を滅ぼしたが結局は北宋は半分金に制圧されてしまった。果て安心して過ごしていた燕も、いくほどの春を送ったことだろう。宋を追いやつて燕の名を冠する燕京を都とした金も結局は宋もるとも蒙古に滅ぼされてしまった。その間、北宋生まれの石家の学士である硯は完全に沈黙していた。当時の歴史の変遷を具に諳んじているが、人にはけつして語らないのだ。

○仲景蓮 中村仏庵。書家。骨董蒐集家。名は蓮。字は景蓮。江戸の人。幕府御畳方棟梁。 ○宣和硯 宣和は北宋の年号。一一一九年～一二二五年。 ○鴻鴈北飛 鴻雁はカリ(秋に来る渡り鳥)のこと。「鴻」は、大きなカリ。「鴈」は、普通のカリ。雁書・雁使・雁信・雁足・雁帛・雁素などの語は消息を伝える手紙のこと。匈奴に捕らえられていた漢の將軍蘇武が、カリの足に手紙を結んで都へ消息を知らせたことから。 ○安巢燕子 燕子は単に燕。雛ではない。

○石家學子 硯の喩え。

◎「枕山詩「宣和硯歌」に從來指摘される五山の詩より星巖の先行作の影響が顕著であることを指摘」(鷲原知良「近世後期漢詩壇の研究」「平成十年度博士論文課程要旨」大阪大学大学院文学研究科紀要40) する論考がある。

◎上平声十一眞

35 春陰

東帝春衣最稱宜 東帝の春衣 最も宜に称ふ
藍青換得染成緇 藍青を換へ得て 染て緇と成す
工夫猶自嫌無色 工夫 猶自ほ 色無きを嫌ふ
更襯梨花要入時 更に梨花を襯けて 時に入らんと要す

春の神様の春着は最も時宜にかなっている。(空を曇らせて) 春色である藍色を染め換えて黒衣とした。それでもなお色の無いのを嫌って工夫を加え、今度は白い梨花の花をほどこして、時の流行に合わせようとしたのだ。

○東帝 春の神。東皇。青帝。東君。 ○稱 かなう、の意は径韻。

はかる、ほめる、の意は蒸韻となる。 ○宜 ちょうど適当である。

○藍青 あい色。顔料の名。青は春の色。 ○猶自 自は助字。

○襯 はだぎ。つく。ほどこす。あらわす。 ○梨花 白い花。黒に映えるのでいう。 ○要 しむける。 ○入時 時俗に合する。

◎上平声四支

36 晚春送川春川南歸(晚春、川春川の南歸するを送る。)

相伴青陽並駕迴 青陽に相伴て 駕を並て迴る

離情同是酒三杯 離情 同じく是れ 酒 三杯

明年我掃茅廬待 明年 我 茅廬を掃て待つ

莫使春來君不來 春 來りて 君 來らざらしむること莫かれ

君は春と相伴つて駕籠を並べて帰つて行く。その別れの思いは、春と君とともに三杯の酒で晴らそう。来年、私は茅の庵を掃き清めて待つていよう。春だけを来させて、君自身を来させないようにしないでもらいたい。

○川春川 川合春川。江戸時代中期から後期の儒者。紀伊和歌山藩儒。一七五一〜一八二四。○青陽 春のこと。○廻 回、廻、と同じ。

○離情 はなれ去る情。○莫使春來君不來 訓読では十分な表現にならないが、使は春をして、君をしての両方にかかる。春をして来らしめ、君をして来たらざらしむこと莫かれ。

○晩春の季節に、その春の名を持つ春川を送るところから発想した詩である。

◎上平声十灰

37 送春

百花飄散全無迹 百花 飄散して 全く迹無し
蛺蝶紛紛去不來 蛺蝶 紛紛 去て来らず
只有牡丹情意厚 只だ牡丹の情意の厚き有りて
送春餞席錦成堆 春を送て 餞席 錦 堆を成す

百花繚乱と咲き誇った春の花も、ひらひらと飛び散って全く跡形もない。揚羽蝶も入り乱れて飛び去ってももう来なくなつた。ただ牡丹の情の厚いのだけが堆く積もつた錦のような花を咲かせ、餞別の宴席で春を送り出している。

○飄散 ひらひらと飛び散る。○蛺蝶 あげはちよう。○紛紛 入り乱れて。乱れ散るさま。○情意 心持ち。

◎上平声十灰、迹は踏み落とし。

38 舟中夜歸

滿天星彩蘸玻瓈 滿天の星彩 玻瓈を蘸す
江上夜深風露凄 江上 夜深で 風露 凄たり
暗處有聲方始覺 暗處 声有り 方に始めて覺る
漁家撒網柳橋西 漁家 網を撒す 柳橋の西

空いっぱい星の輝きがガラスのような水面に映じている。川のほとりでは、夜が深くて、風や露で肌寒くなってきた。暗いところで声があるので、ちょうど始めて気づいた。柳橋の西では、漁師たちが網を打っているのだ。

○撒網 撒は、まく。隅田川下流で名物だった、白魚漁など。○柳橋 神田川の柳橋か。一般名詞か。

◎上平声八齊

39 蘆花雙鳧圖

沙頭交翅坐相俛

沙頭 翅を交て 坐まゐに相俛よりあふ

風撼蘆花睡欲回

風 蘆花を撼ゆして 睡り 回らんと欲す

玉殿朱樓豈無夢

玉殿朱樓 豈に夢に無からんや

曾隨葉令造朝來

曾て葉令に隨て 朝に造り來る

水際の砂に翼を交えて、なにもすることなく寄り添っている鴨二羽。風が、その周りの蘆の花をゆらして、鴨の睡りを覚まそうとしている。彼ら二羽は、美しい宮殿を夢に見ないことがあるうか。かつて葉令に従って朝廷に上つていたくらいなのだから。

○鼻 のがも、まがも。互にくつついて群を成す。○坐 そぞろに。なにするともなく、なんとなく。○俛 ほのか。なじむ、したしむ。ちかよる、よりあふ。○撼 ゆらぐ、ゆする。○玉殿 美しい宮殿。○朱樓 朱塗りのうてな。○曾隨葉令造朝來

「葉令」は王喬のこと。「顯宗の世、葉令と為る」とある(「蒙求」)「王喬雙鳧」。王喬は朝廷に出仕するのに車を使わず雙鳧を使ったという故事。○造 いたる、つくる。○造朝 朝廷に参上する。

◎上平声十灰

40 雲出山腰(雲、山腰を出づ)

山靈無奈嬾眠何

山靈 嫩眠を奈何ともする無し

日出方纔脱被窩

日 出でて 方に纔に被窩を脱す

翠頂髻鬆猶未帽

翠頂 髻鬆として猶ほ未だ帽せず

先呼雲帶曳輕羅

先づ雲帶を呼で 輕羅を曳く

山の神はいねむりをむさぼるのをどうすることもできないのだろう。日が高く昇つてから、まさにやつとふとんから抜け出てきた。緑の頭はぼうぼうで、まだ帽子をかぶることもしていない。まずは雲を呼んで帯のごとくうすものを腰にするのだ。

○山靈 山の神。山の靈。○奈々何 奈何を分割した言い方。○被窩 寢具。「被」は、かけふとん。○髻鬆 髻鬆は、髪かみの乱れたさま。「髻」は「鬆」と同じ。○雲帶 雲が山の中腹をめぐつて帯のように見えること。「雲帶環山白髻腰」(和張舍人・吳融)。

◎下平声五歌

41 夜雪

夜雪三更壓繡覺

夜雪 三更 繡覺を圧す

樓樓絲管凍無聲

樓樓の糸管 凍て声無し

時清上下同高枕

時 清くして 上下 同じく枕を高うす

無復人尋趙則平

復た人の趙則平を尋ぬる無し

夜の雪が真夜中まで降り続き、花街の美しい聲を隠してしまった。多くの高樓から聞こえるはずの管弦の音も、凍って音も無いようだ。時代が、治まっているおかげで、上の者も下の者も同じように枕を高くしている。こうした時代では、かつての太祖のごとく雪の夜に名宰相の趙則平を尋ねる人もいないだろう。

○趙則平 趙普。宋の人。字は則平。剛毅果断の名宰相。雪の夜に微行して訪問した太祖を焼き肉でもてなし、二人で戦略を練ったという(『宋史』卷二五六列伝「趙普」)。

◎『五山堂詩話』卷八に詩とエピソードを載せる。詩句に異同はない。「澤山、神戸侯、諱は忠裔、字は子然。猗蘭公の孫為り。余、昔日、深く知遇を忝くす。中略。一夕、宴に待す。是の夜、大いに雪ふる。公、「夜雪」を以て題を命ず。字を覆ひて以て余に韵を授く。覆を披けば則ち平の字なり。蓋し、公、故らに艱險を以て窘めんと欲するも、左右、書する者、誤て平の字を以て、平の字と為すならん。公、就はち曰ふ。平の字、實に平平と為す。但だ雪平、昇平等の語を禁ず。余、謹て奉諾す。乃ち筆を援て書して云ふ。」の後に詩が紹介される。神戸侯は、本多忠裔(ただひろ)。大名。神戸藩主(かんべ、三重県鈴鹿市)。一七五五〜一八〇三。「平」の韻字で平凡な語を禁じられた五山が「趙則平」という題になかった、しかも特殊な語で切り抜けた機知の話題である。

◎下平声八庚

42 春初絶句

淡日輕煙春已饒 淡日 輕煙 春 已に饒し
出門還懶度溪橋 門を出でて 還た溪橋を度るに懶し
新年第一詩猶未 新年 第一の詩 猶ほ未だし
恐被梅花笑寂寥 恐くは梅花に寂寥を笑はれん

淡く日が射し薄い霏が出て、春景もすでに豊かになってきた。門を出るには出たが、谷川の橋を渡るのもものうい。新年最初の詩もまだ出来ていない。虎溪三笑のように橋を渡ったわけでもないのに、恐らく梅花に、詩が無くて寂しいよと笑われているだろう。

○度溪橋 虎溪三笑のイメージを借りるか。○転句 二三二の区切りになっている。○笑寂寥 「梅雨遣悶」(六如)に同様の句がある。

◎下平声二蕭

43 雨中櫻花悼佐羽翁

(雨中の桜花 佐羽竹翁を悼む。)
仙葩豈可久塵寰 仙葩 豈に塵寰に久しかるべけんや
帝遣靈師急召還 帝 靈師をして急に召し還らしむ
一夜芳魂歸玉府 一夜 芳魂 玉府に帰る
空濛煙雨暗人間 空濛たる煙雨 人間暗し

仙界の花がどうしてこの俗世間に長く留まろうか。天帝が靈師を遣わして急に召し還らせてしまった。桜は一夜にして散り、その美しい魂は仙界に帰ってしまった。ぼんやりとした霧雨が降って、この人間世界は暗く輝きを失ってしまった。

○佐羽竹翁 元文三年（一七三八）〜文化九年（一八一二）。桐生の

商人、漢詩人で江湖詩社のパトロンの存在であった佐羽淡齋の兄。

○雨中櫻花 竹翁の辞世の発句「寝ころをあめのさくらになやみけり」による詩題（左記の山田氏論文）。○仙葩 仙界の花。「葩」は、

はな。ぱつとさいたはな。白いはな。○塵寰 けがれた世界。俗世間。

塵界。「寰」はある範囲の中の地。○靈師 竹翁本人。天からの使者ともとれる。○芳魂 花の精。竹翁を桜花に喩えるのでいう。

○玉府「道観、仙府、仙宮」〔漢語大詞典〕○空濛 小雨が降ったり、もやがたちこめたりしてぼんやりと薄暗いさま。「山色空濛雨亦奇」

（飲湖上初晴後雨・蘇軾）○煙雨 けむったようにかすんで降る雨。「秋菱葉爛煙雨晴」（射鴨詞・高啓）

○「花濺淚帖」と「清風集」―江戸時代後期絵画史資料二点「山田烈」（東北芸術工科大学紀要（13） 2006-03）

○淡齋は兄を悼んで「惜花帖」（文化九年刊）を出版した（『桐生市人名事典』）。その「惜花帖」に寄せた五山の詩がこの詩である。詩句の異同はない。この詩は文化九年の作ということになる。なお、『花濺淚帖』（東北大学付属図書館所蔵）と『惜花帖』（桐生市立図書館所蔵）

と『雨桜帖』（東京都立中央図書館所蔵）は同一の書で、異本関係にある。

◎上平声十五刪

44 三月晦同諸子遊仁聖侯第五橋別墅

（三月晦、諸子とともに、仁聖侯第五橋の別墅に遊ぶ。）

殘鶯聲裏已無春 殘鶯声裏 已に春無し

猶有藤花挽住人 猶ほ藤花の人を挽住する有り

多謝一池明似鏡 多謝す 一池 明 鏡に似て

洒然洗盡滿顏塵 洒然として洗尽す 滿顏の塵

三月の晦日、諸氏とともに、市橋長昭侯の五之橋町の別荘に出かける。

晩春の鶯が鳴く中、もう既に春は終わっているが、まだ人を引き留めるような藤の花だけは残っている。厚くお礼申し上げる、池が全て曇らないこと鏡のようで、さっぱりと顔中に着いた俗世間の塵を洗い尽くすことが出来たのを。

○三月晦 文化九年か。五山は文化九年八月に寛齋・詩佛とともに『占風園四時勝概画譜同四時絶句同四時和歌』に揮毫している。

○同諸子 とともに揮毫しているのは、『四時絶句』は市河寛齋、大窪詩佛、『四時和歌』は横田袋翁、塙保己一、屋代弘賢、『勝概画譜』は

長尾仙助祐壽である。 ○仁聖侯 市橋長昭。近江仁正寺藩主(二万

石)。文化十一年没。五山と仁聖侯の交流は『五山堂詩話』巻七、巻十にも述べられている。占風園の記録としては元禄期の『占風園十境詩録』(林整宇、林復軒、木下順庵など。二〇一五年現在「国立国会図書館デジタル化資料」で閲覧できる)を市橋長昭が筆写したものがあつた。先祖の風雅に倣つて当代に再現したか。 ○第五橋別墅

本所五之橋町の下屋敷に占風園という庭園があつた。現在、亀戸南公園。『占風園四時勝概画譜同四時絶句同四時和歌』に詳しい。漢詩は寛齋・詩佛・五山の三人が担当。 ○殘鷺 晩春に鳴く鷺。 ○

藤花 占風園には池にかかる藤があつた。 ○挽住 引き留める意。陸游、楊誠齋などに見られる語彙。「挽住行人贈一枝」(雨後田間雜紀五首・楊誠齋) ○多謝 厚く礼を述べる意。占風園へ招かれた礼。

○一池 占風園には広大な釣月池があつた。 ○洒然 心がさつぱりとわだかまることがないこと。

◎上平声十一眞

45 賀賣花翁五十

絳人 説歳非無例 絳人 歳を説く 例無きに非ず

花信番番算不窮 花信 番番 算して窮らず

喚做神仙君會否 喚て神仙と做す 君 会するや否や

一千二百閨春風 一千二百 春風を閨す

年齢の数え方を知らなかつた絳県の老人が自分の歳をもつてまわつて説明した例が無くはない。しかし、一年に二十四番の花信風に五十分は計算してもし切れないほどだ。そこで、神仙と呼ぶ事にするが、君にわかつてもらえるかどうか。知らぬうちに一千二百回もの春風を味わつているのだ。

○賣花翁 未詳だが佐原菊塙だとする説がある(『江戸詩歌論』)。

○絳人 絳県の人が、「生まれた年は正月甲子の朔で、それから四百四十五回の甲子が廻つたが、その最後の甲子の日から今日までの甲子までの三分の一が過ぎた」(『左伝』襄公三十年二月)と言つた故事をふまえる。 ○二十四番花信風 二十四節氣の小寒の梅に始り穀雨までの、それぞれの花の開くのを知らせる風。

◎『五山堂詩話』巻八に「壽賣花翁五十」として載せる。詩題に小異あり(壽賣花翁五十)。

◎上平声一東、例は踏み落とし。

46 四月二十七日陪南谷瀧公遊玉川途中得十絶句

(四月二十七日、南谷瀧公に陪して玉川に遊ぶ。途中、十絶句を得たり。)

出城已覺遠風塵 城を出でて已に覺ゆ 風塵に遠きを
緑樹重重入眼新 緑樹 重重 眼に入て新なり

雪様蓄微還後素 雪様の蓄微 還て素を後にす
天将繪事欲誇人 天 絵事を將て 人に誇らんと欲す

市街を出て俗世間から遠ざかったのを感じた。幾重もの新緑の木々は目にも鮮やかだ。雪のように白いバラはいつもと逆に、白絹を(緑樹の)背景としている。天は巧に絵を描いて人間に誇ろうとしているようだ。

○四月二十七日 71に「四月十九日陪南谷瀧公重遊玉川十絶句」があり、一年後に再遊したらしい。 ○南谷瀧公 瀧川南谷。幕臣、漢詩人。宝曆十年(一七六〇)〜文政三年(一八二〇)没か。『五山堂詩話』巻六に紹介がある。 ○玉川 多摩川。 ○已覺 1詩「已知」の注参照。覺ということが起きたの意。 ○風塵 俗世間。 ○緑樹重重 重重は、いくえにも。「重重紅樹秋山晚」(九月三日泛舟湖中作・陸游)。 ○還 普通は花が前に出そうなものだが、のニユアンス。 ○後素 (緑樹の) 白い背景となっている。「素」は蚕から打ちだした絹の原糸。

◎上平声十一眞

47 その2

淡陰不雨午将晴 淡陰 雨ふらず 午 將に晴れんとす
衣薄未知微暖生 衣 薄くして 未だ知らず 微暖の生ずるを

只有飛飛叫天子 只だ飛飛たる叫天子の有りて
凌空早已弄和聲 空を凌て 早く已に和声を弄す

薄曇りで雨の降らないうちに昼になって晴れようとしている。衣服が薄いためか、まだ微かな暖かさが生ずるのにも気づかない。ただ、ひらりひらりと飛ぶヒバリがいて、大空を凌ぐように高く上がり、早くも暖かさを感じて穏やかな鳴き声を弄している。

○飛飛 ひらりひらりと。「清秋燕子故飛飛」(秋興八首・杜甫) ○叫天子 ヒバリの異名。告天子(19)〜21詩参照。……「云叫天子」(三才図会) ○早已 「早ク已ニ」は、「已は本義訖ルなり。既は本義盡ルなり。早已アリ、早既ナシ。同異みるべし」(詩家推敲) ○和聲 おだやかな声。 ◎下平声八庚

48 その3

邨路短長無準説 邨路の短長 準説無し
忽聞便喜忽聞驚 忽ち聞て便ち喜び 忽ち聞て驚く
前人道是可三里 前人は道ふ 是れ三里可^ほかり
更問後人多幾程 更に後人に問へば 幾程を多くす

田舎の道のりで、遠い近いなどという話はあてにはならない。残

りの道のりを聞いて素直に喜んだかと思うと、たちまちまた聞いてはがっかりする。前の人は「三里くらいだ」と言うが、また、後の人に聞くと幾里も多くなっているのだ。

りしている。停泊したところから舟が離れるのも、はじめから気づかず、気づいてみると既に自分の身は四方、玻璃のごとき鏡面の海の上に座っていた。

○**郵路短長** 「遠くてちかきもの。極楽。船の道。男女の仲」(『枕草子』160段) などから俗に「近くて遠いは田舎の道、遠くて近きは男女の仲」○**準説** 基準となる説の意か。○**忽々** 忽々……したかと思えばたちまち……し、……したかと思えばたちまち……する。○**便** すぐに、急に。そうするとたやすく。○**可三里** 「可」は、「ばかり」と読み、「(まあ)くぐらい」の意。時間・空間・数量などのおおよその範囲や程度の意を示す。「壮騎可数百……」(史記・衛將軍驃騎)

○**下平声八庚**、説は踏み落とし。

49 舟曉

長庚如李月沈西 長庚 李の如く 月 西に沈む
海霧將消望暫迷 海霧 將に消んとして 望 暫く迷ふ
泊處舟離元不覺 泊処 舟離るるも元と覺えず
四圍身已坐玻璃 四圍 身は已に玻璃に坐す

金星は李白の誕生の時のように東の空に明るく耀き、月は西に沈もうとしている。海の霧も消えるところで、眺めもしばらくぼんやり

○**舟曉** 舟の上で夜明けを迎えること。○**長庚如李** 「長庚」宵の明星、金星の別名。金星は日没後に西天に輝き、明け方東に沈む。李白は、母が夢で長庚(金星)を懐に入るのを見て妊娠したことから李長庚ともいう。また、金星を太白というところから李太白ともいう。揚子江に映る月を捉えようとして水死したという伝説がある。金星は李白のように明るく輝やきの意か。「長庚如李一星明」(曉起・江馬細香)の詩は、「五山堂詩話」巻五にも紹介されている。○**元** はじめは、の意。舟が離れはじめた時は、の意。「元は始也首也ト訓ズ二字と同様」(『詩家推敲』) ○**身已坐** 「横看成嶺側成峰、遠近高低各不同。不識廬山真面目、只緣身在此山中。」(題西林壁・蘇軾)の類想か。

○**上平声八齊**

50 梅雨晴

城中昨夜送輕雷 城中 昨夜 輕雷を送る
日氣烘紅暑驟回 日氣 紅を烘り 暑 驟に回る
已作一年鹽漬計 已に作す 一年塩漬の計
家家蘆箔曬黃梅 家家 蘆箔に黃梅を曬す

昨晚、町では雷が鳴っていたのだが、今日は、すっかり太陽が照りだし急に暑くなってきた。既に一年分の漬け物の計画が出来ていて、家々では、むしろに熟した梅の実を干している。

○梅雨晴 漢詩の詩題には珍しい。季語では仲夏。梅雨の合間の晴天。梅雨が明けての晴天。○烘 73詩にも。あぶる。○鹽漬 エンシ。ここは梅干し。○蘆箔 箔は、箔。くさとたけの冠の通用。72にも。蘆箔は、むしろ。「柔桑採盡緑陰稀、蘆箔蠶成密繭肥。」(郊行・王安石)、「角頭一一張蘆箔、不遣魚蝦過別塘。」(過臨平蓮蕩・楊萬里) ○曬 『文政十七家絶句』に収録される。「曬」が「晒」と表記。
◎上平声十灰

51 枕岸棣棠 仁聖侯占風園十五勝之一

紅紫已非時世粧 紅紫 已に時世の粧に非ず
春風一様換宮黃 春風 一様 宮黄に換ゆ
萬畦塗抹菜花遍 万畦 菜花を塗抹すること遍し
更就池邊染棣棠 更に池辺に就て 棣棠を染む

春先の紅や紫はもう既に流行の装いではない。春風は一樣にお庭を御殿風の黄色に変えてしまった。萬畦もの広さを菜の花の黄色で塗りつぶし、更に池の辺りでは山吹を濃い黄色に染めるのだ。

○仁聖侯 近江仁正寺藩主。44詩参照。○十五勝 『占風園四時絶句』は寛齋・詩佛・五山の三人で五首ずつ計十五首で十五勝を詠む。

○枕岸 「岸に枕(のぞ)む」。川に臨む絶壁から生えている木などの表現。枕江は臨江と同じ。○粧 妝の俗字。○棣棠 木の名。ヤマブキ。バラ科ヤマブキ属の落葉低木。山野に自生する。○宮黄 「古代婦女額上塗飾の黄色」という(漢語大詞典)。宮額は、(御殿風に粧った額。起句の「時世粧」に対して言う。○畦 田地を区切る単位。田地五十畝。畝は時代によって異なるがだいたい5、6アール。萬畦は非常に広いこと。

◎占風園に関しては44詩注参照。画譜が国会図書館に現存し、当時の様子が知られる。ここでは『占風園四時勝概図 同四時絶句 同四時和歌』に収める五首のうち三首(51、52、53)を収める。
◎下平声七陽。

52 蓮塘風香 同上

層層葉戰水風醒 層層たる葉は戦ぎて 水風に醒む
拂曉看来只麼青 拂曉 看来れば 只だ麼かに青し
生恠濃香沁人骨 生恠す 濃香の人骨を沁むを
不知中貯幾婢婷 知らず 中に幾婢婷を貯ふるを

幾重にも重なった蓮の葉をそよがせて水面を吹く風がすっかりと私の目を覚ましてくれる。夜明け時に見るとただ微かに葉の青さだ

けが見える。不思議なことに、濃厚な香りが人の身にしみるほど漂ってくる。いったいどれほどの美しい花を中に秘めているのやら。

○醒 自分の目を覚ましてくれる。 ○塵 こまかい。かすかに。

○生恠 「生憎、生妬、生恨、生愁」などの生は助字。(『詩家推敲』)
恠は怪の異体字。 ○婢婢 みめよいさま。うつくしいさま。

◎『古風園四時勝概図』同四時絶句 同四時和歌』夏、『蓮塘』

◎下平声九青

53 孤島寒松 同上

何歳蒼官亦避秦 何れの歳か 蒼官も亦た秦を避く

遠逃孤島隔紅塵 遠く孤島に逃れて 紅塵を隔つ

四時代謝曾無管 四時の代謝 曾て管すること無し

却笑桃源猶有春 却て笑ふ 桃源 猶ほ春有るを

いつの年のことだろうか、蒼官である松もまた秦の国乱を嫌って難を避けたのは。遠く孤島に逃れて来て、すっかり俗塵から身を隔てた。常緑の身、四季の移り変わりにも、まったく関係なくなつて、奥深い理想郷であるはずの桃源でさえまだ桃が咲くという春の季節の巡りがあるのを笑い飛ばしている。

○蒼官 松の異名。官吏であるから官を去つたことになり、松の青

であるから、桃の花を暗示する紅塵を隔てることになる。単に松を異名に置き換えただけでなく字面を生かしている。 ○亦 桃源郷の人たちもそうだったし松もまた、の意。 ○避秦 定型的な表現。「先世、避秦時乱、率妻子邑人、来此絶境、不復出焉。遂與外人間隔。」

(陶淵明「桃花源記」)

◎『古風園四時勝概図』同四時絶句 同四時和歌』冬、『孤島』

◎類想句として五山本人の「蒼官歳晚最精神、風雪山中不記春。」(『皇朝分類名家絶句』巻四「歳暮松 和歌題」)がある。

◎上平声十一真。

54 手植梧桐為家人所伐

(手植の梧桐、家人の為に伐る所となる。)

栽桐幾歳近階除 桐を栽て 幾歳 階除に近し

最愛扶疎入夏初 最も愛す 扶疎 夏に入るの初め

不念家人危剪盡 不念なり 家人の危んど剪り尽くすを

朝来無意愛吾廬 朝来 吾が廬を愛するに意無し

自ら植えた梧桐の木が、家人に剪られてしまった。

青桐を植えてから幾年経つたろうか、庭へ出る階に近づくまでになつていた。最も気に入つていたのは、夏に入りたての頃の枝が四方にひろがるさまだ。それを惜けないことに家人がほとんど伐り尽くしてしまった。朝早くから始めて、私が庵を愛することには全く

おかまいなしだったのだ。

○危 原本「ント」の送り仮名がある。「危ハ殆也ト訓ス」(『詩家推敲』)。
○不念 無念にも。「不念は不勝念ライフ」(『詩家推敲』)

◎上平声六魚。「愛」字が二箇所に用いられている。

55 その2

落蕊風輕點硯池 落蕊 風輕くして 硯池に点ず
雨餘深碧染烏皮 雨餘の深碧 烏皮を染む
自今横被紅暎透 今より 横さまに 紅暎に透けらる
飽領清陰彼一時 飽くまで清陰を領せし 彼も一時

花びらが落ちては軽く風に乗って、硯の池に点々と舞い降り、雨上がりの深い緑色が黒皮の脇息に陰を落としていた。しかし、その梧桐がなくなつて、これからは真つ紅なまん丸な朝日の光が横から直接射してくるようになった。今まで十分に清らかな陰を確保していたが、それもほんの一時のことであつた。

○蕊 はな。しべ。 ○硯池 硯の水たまり。 ○烏皮 黒い皮。「烏皮几」の用例が多くそれなら黒皮の脇息。 ○彼一時 「彼も一時、此も一時」(『孟子』「公孫丑下」)による。世間のことは時とともに変転して止まない。栄枯盛衰もそのとき限りのことである、の意。

世の中のことを梧桐と自分の卑近な事柄に置き換えた諧謔。
◎上平声四支

56 その3

愛他疎滴梧桐句 愛す 他の疎滴梧桐の句
點點真成澄道心 点点 真成に道心を澄す
昨夜酒醒涼雨過 昨夜 酒醒て 涼雨 過ぐ
窗前無地着清陰 窓前 地の清陰を着くる無し

あの「疎滴梧桐」の古句がお気に入りだ。点点とした雨だれの音は本当に菩提心を澄ませてくれる。昨夜、酒が醒めると夏の涼しげな雨が通りすぎていた。しかし、残念なことに窓の辺りには雨上がりの清らかな陰を落とすことができないのだ。

○疎滴梧桐句 「窓前有梧桐 報我以好雨。不眠聽疎滴、佳事想農圃。……」(宋・曾幾「夏雨應祈呈桂帥二首其一」)をさすか。61詩に「疎雨滴梧桐」の句がある。 ○道心 仏教を信じ悟りを得ようとする心。菩提心。

◎下平声十二侵、「句」(去声七遇)は踏み落とし。

57 その4

羣卉發生均遂真 羣卉 發生して 均しく真を遂ぐ

若為戕賊自傷仁

若為んぞ 戕賊して

自ら仁を傷らん

癡童呆僕何知此

癡童 呆僕 何ぞ此を知らん

一段酸心是主人

一段の酸心 是れ主人

それぞれの花たちは開き生じ、どれも等しくありのままの本性を發揮している。どうしてそれを殺してしまつて自分で自分の仁の心を傷つけてしまうのか。そうはいつても、馬鹿な書生や阿呆の従僕にどうしてそれがわかろうか。ひとしお心を痛めているのは、主人である私だけなのだ。

○發生 「好雨知時節、當春乃發生」(春夜喜雨・杜甫)。○真 充
実した自然のままの本性。○戕賊 戕は戕と同字。そこない殺すこと。

○酸心 心を痛めること。○一段 ひときわ。一層。

◎上平声十一真

58 同柴碧海田紫石晚泛兩國

(柴碧海・田紫石と同じく、晩に兩國に泛ぶ。)

笙歌鼎沸夕陽天

笙歌 鼎沸す 夕陽の天

誰復酸寒似我船

誰か復た 酸寒 我が船に似ん

多謝清風廉徹底

多謝す 清風 廉 徹底するを

輸來萬斛不租錢

万斛を輸し來て 錢を租せず

柴野碧海・杉田紫石とともに、晩に兩國で舟遊びする。

夕暮れの空の下、歌や笛の音が沸き立つようににぎやかだ。その中で他の誰が、貧乏つぶりで我々の船に勝ろうか。おおいに感謝するのは、清風の清廉潔白さが徹底していることだ。大量の風を運んでてくれるのに年貢のように金を取ったりはしないのだ。

○柴碧海 柴野碧海。安永二年(一七七三)〜天保六年(一八三五)。

柴野貞毅の二子。伯父栗山の養子。五山とは若い頃(京都遊学、栗山門下)からの友人。○田紫石 杉田伯元。宝曆十三年(一七六三)〜天保四年(一八三三)。紫石は号。医者、蘭学者。杉田玄白の門

人・養子で、二代目杉田玄白となる(『五山堂詩話補遺』卷二39話)。柴野栗山に儒学を学ぶ。○兩國 兩國の船遊び。○鼎沸 かな

えの湯が沸騰するようにさわぎたつこと。○酸寒 貧乏でつらい。みすばらしいこと。○萬斛 非常に分量の多いこと。斛は石。一斛は十斗。一斗は十升。○租 田にかかる年貢。

◎下平声一先

59 夏山疊翠圖

化工染手不曾閑

化工の染手 曾て閑ならず

褶疊纈來濃淡山

褶疊纈し來る 濃淡の山

傾瀉盆中藍瀦水

傾瀉す 盆中の藍瀦水

溪流滾翠出人間

溪流 翠を滾して 人間に出つ

夏の山の緑が重畳とする絵

自然界の染め手はかつて暇だった試しはない。うわぎを重ねて絞
り染めして、山の緑の濃淡を作った。そして、余った藍染料を溶い
た水の入った盆を傾け注いだ。谷川では、その緑の色が流れをたぎ
らせて人間世界に出てきている。

○夏山疊翠圖 「山疊翠圖」という画題がある。 ○化工 自然

のわざ。造化のたくみ。天工。 ○褶 あわせ。うわぎ。 ○藍瀋
水。藍水は藍を溶かした水。瀋は汁。藍水も瀋水も川の名の意もある。

ここは染料の入った水。

◎上平声十五刪

60 雨凉

黄昏一雨灑池亭 黄昏の一雨 池亭に灑ぐ

探借清秋暑頓醒 清秋を探借して 暑 頓に醒む

弱翅翻知不堪冷 弱翅 翻て知る 冷に堪えざるを

窗間飛入小蜻蜓 窓間 飛び入る 小蜻蜓

たそれがれ時にひと雨来て、池の畔の亭を濡らす。さわやかな秋の
気配を先取りして、暑さにもわかにはひっこんだ。でも、逆に、薄物
の羽では、この寒さには堪えられないようだ。寒さから逃れて、窓
から入ってくるのは、小さなトンボたち。

○探借 「預借」(『漢語大詞典』)。 ○弱翅 螢、蟬、蝶などの用例
がある。 ○小蜻蜓 宋詩的素材。

◎下平声九青

61 疎雨滴梧桐

三三五五 点じ来て稀なり

竹簾涼生夢醒時 竹簾 涼 生ず 夢の醒る時

此滴不知梧葉雨 此の滴 知らず 梧葉の雨なるを

只言宵永漏聲遲 只だ言ふ 宵 永くして 漏声 遅しと

三つあるいは五つとぼつりぼつり滴り落ちる音が時々聞こえる。
そんな音を聴きながら夢から醒る時、竹の敷物の上はますます涼し
い。しかし、あまりにまばらなのでこの滴りが梧桐の葉へ降る雨音
であることには気づきもしない。そしてただ、宵が長くなって漏刻
の音が遅くなったなどと言っているのだ。

○疎雨滴梧桐 56詩に似たテーマの詩がある。 ○三三五五 三人

又は五人ばらばらと散乱するさま。 ○點 したたり。 ○竹簾

竹や葦で編んだ敷物。「竹簾冷生秋」(幽居詩・陸游。「簾」一字で、

たかむしろ、竹で編んだむしろ、の意。 ○梧葉雨 梧桐の葉に雨

が当たる音はよく用いられる詩材。「枕邊梧葉雨聲疏。」(秋日再寄・

晁采) ○漏 漏刻。水時計。一定の時間を示すので日盛りを変えて

不定時法に合わせた。ここは時の鐘。「二十五聲秋漏永」(古斷腸曲・周端臣)

◎上平声四支、稀は上平声五微の通韻。

62 狸奴

狸奴亦解弄涼秋 狸奴も亦た解す 涼秋を弄するを
遊戯池頭儘自由 池頭に遊戯して 儘ま自由
銜得螳螂斧先破 螳螂を銜へ得て 斧 先づ破る
擒来縦去未曾休 擒し来り縦し去て 未だ曾て休まず

猫もまた涼しい秋を楽しむことを理解していて、池のほとりで好き勝手に遊び戯れている。かまきりを口にくわえてきて、斧のところをまず食い破った。ほしいまますつかりとりにしてけつして止めないのだ。

○狸奴 猫の別名。

◎下平声十一尤

63 舟中聞蟲

忽訝琵琶江上音 忽ち訝る 琵琶 江上の音かと
還疑鈴曲雨成霖 還た疑ふ 鈴曲 雨 霖を成すを
萬蟲於我真勍敵 万虫 我に於て 真に勍敵けいてき

碎破孤舟一夜心 碎破す 孤舟一夜の心

ふと訝るのは、あの白居易が聞いた江上の琵琶の音かということ。また疑うのは、あの玄宗が貴妃を悼んで作った雨霖鈴の曲かということ。そんな全ての虫達の鳴く音は、私にはまさに強敵だ。一隻の小舟で一夜を過ごす私の心をかきむしってしまうのだ。

○忽訝琵琶江上音 白居易が潯陽江頭に琵琶の音を聴いた故事。「忽聞水上琵琶聲」(琵琶行・白居易)。○鈴曲雨成霖 雨霖鈴曲「樂曲の名。唐の玄宗が、安祿山の乱を避けて、蜀に幸し、途中、寵姫、楊貴妃を誅した後、棧道に於て、雨の声と馬の鈴の相和するを聞いて貴妃を悼み悲んで作ったという(『明皇別録』)。雨霖鈴は詞牌のひとつ。なお、長恨歌では「行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸斷聲」と場は行宮。○勍敵 強い對手、強敵。

◎下平声十二侵

64 送栞原生歸阿波(栞原生の阿波に帰るを送る。)

何須筆底強求音 何んぞ須るん 筆底 強て奇を求むることを
萬象睨来皆是詩 万象 睨し来れば 皆な是れ詩
鼇林鯨吞鳴戸海 鼇林うべん 鯨吞 鳴戸の海
子歸對此有餘師 子歸て 此に對せば 余師有らん

どうして物を書くのに強いて珍奇なものを求める必要があるうか。森羅万象、じっと見つめればみな詩にならないものはない。ましてや、大海亀が手を打ち、鯨が海水を呑むという鳴戸海峡。あなたが帰国してこの景色に向き合えば、私がいなくてもどこにでも師匠がいることがわかるだろう。

○兼原生 「桑原道、字は文友、琴水と號す。阿波の人。木鳴門を介して余に従ひ詩を學ぶ」(『五山堂詩話』卷六)。木鳴門は鈴木木鳴門、阿波出身の画家。○筆底 書くこと。○睨 睨睨の睨。睨

睨は横目でにらむこと。○鼈拵 鼈(おおうみがめ・おおうすっぽん)が手をうつ。また飲んで手をうつ。○鳴戸 阿波の鳴門海峡。

○子歸 結句は「子歸而求之有餘師」(子歸りて之を求めば餘(多)くの師あらん)(『孟子』「告子下」)に依っている。「餘師」は他の先生。一説に多くの先生。

◎上平声四支。『文政十七家絶句』33才に収録される。

65 浪華馬國瑞為鴻池生寄其詩來并報二子

(浪華の馬國瑞、鴻池生の為に、其の詩を寄せ来る。并せて二子に報ず。)

封書到手恨開遲 封書 手に到て 開くの遅きを恨む
細讀銀鉤喜上眉 細に銀鉤を読みて 喜 眉に上る
一喜却能添一喜 一喜 却て能く 一喜を添ふ

故人新友有温知 故人 新友 温知有り

大阪の馬國瑞が、鴻池君のために、彼の詩を送って来た。そこで二人いっしょに詩を送る。

封された書が手に到って、それを開くわずかな間さえ遅く感じられるのが恨みだ。流麗な字を細かく読めば、喜色が眉に上ってくる。一つの喜びがさらに、もうひとつの喜びを添えてくれた。温故知新の言葉のように古い友人が新しい友を知らせてくれたのだ。

○馬國瑞 『五山堂詩話』卷六46話に「馬光昇、字は國瑞」とある。この詩も同47話に載せる。異同なし。寛政十年(一七九八)、五山が三十歳のころ、西国へ流落した時の知人。○鴻池生 『五山堂詩話』

卷六47話に「山當庸、字は行謹」とあるのが同一人物と思われる。

○銀鉤 銀製のかぎ。非常にたくみな草書を形容することはとしても用いる。「太常妙蹟兼銀鉤」(画中九友歌・呉偉業) ○温知 一句で温故知新の熟語を順を変えて用いた。

◎上平声四支。

66 夜間落葉

霜後風師盛勒兵 霜後の風師 盛に兵を勒す
一鑿木葉不容情 木葉を一鑿して 情を容れず
錦衣委地渾狼藉 錦衣 地に委して 渾て狼藉

逐北通宵尚有聲 北ぐるを逐て 通宵 尚ほ声有り

秋となり霜の降りる頃、風の將軍は盛んに風の兵を動かす。木の葉を皆殺しにして、情け容赦ない。錦の衣は地に落ちたまま全て散乱している。更に逃げる葉に追い打ちをかけて一晩中、まだ何か声がかしている。

○風師 風の神。師という表現が次の兵を導く。 ○勒兵 兵をおさめととのえる。軍隊を統御する。 ○狼藉 物が散乱したさま。オオカミが寝るときに下草を踏み荒らすところから。無法のニュアンスは日本特有の意。 ○北 動詞。敵に背を向けて逃げる。敗北。 ○下平声八庚

67 冬日田園雜興 原三

嫁女城中已抱孩 女を城中に嫁して 已に孩を抱く
終年相面兩三回 終年 相面すること 兩三回
水仙蘆葦俱裝擔 水仙 蘆葦 俱に裝担し
衝雪今朝入郭来 雪を衝て 今朝 郭に入り来る

娘を町中に嫁がせてもう赤子を抱くようになった。一年で顔を合わせることは二、三回だ。水仙の球根や大根やらを土産に、いっしょくたに腰にぶら下げて、雪もものともせず今朝は町にやってきた。

○孩 あかご、みどりご。 ○水仙蘆葦 水仙の球根と大根。水仙は食用にならないので園芸用。

◎絶句の連作である点など、10詩「夏日雜吟」よりもさらに「四時田園雜興」の影響が顕著な作品である。

◎上平声十灰。

68 山陰歸棹圖

竹下肩輿雪裏舟 竹下の肩輿 雪裏の舟
王家兒子見人羞 王家の兒子 人を見て羞つ
自能老戴諳他性 自ら能く 老戴 他かれの性を諳んず
一任歸橈不要留 橈かに一任して 留とどむることを要せず

竹林の下では肩でかつぐ輿、雪の中では舟に乗っては来たが、王家の息子子猷は人を見て羞じらつて帰つたのであろう。老戴安道は自ら彼の性質を熟知していて、棹をめぐらして帰るのにまかせて、けつして引き留めようとはしなかったのである。

○山陰歸棹圖 一般的には「子猷訪戴図」という画題。子猷訪戴(剡溪訪戴とも)の故事に基づいている。故事は「雪の夜、王子猷(王徽之)が、思い立って剡溪に戴安道を訪ねたが、門前まできて引き返した。人にその理由を尋ねられて、興にまかせて行つたが、興が尽きたので引き返したまでだと答えた。」(世説新語・任誕篇) ○王家兒子

子猷が王羲之の子であるのによる。 ○老戴 故事の戴安道を指す。

◎下平声十一尤。

69 送松篤所歸馬山

(松篤所の馬山に帰るを送る。)

去違知己住違親 去れば知己に違ひ 住すれば親に違ふ

問我何方可化身 我に問ふ 何れの方ぞ身を化すべきと

有術山中君試否 術有り 山中 君 試みんや否や

筆雲墨雨嘖都人 筆雲墨雨 都人に嘖す

江戸から立ち去れば知人友人に離れることになり、留まれば親に背くことになる。私に、どちらの方へ身を寄せるべきかという難問を投げかけた。そこでいい術がある。山中で君は試したかどうか。よい詩でも書いて故郷に居ながらにして雲の筆と雨の墨で江戸の人達に降り注げばいいのだ。

○松篤所 松浦篤所。字は乃侯。上野の人。天明元年(一七八一)

文化十年(一八一三)、『五山堂詩話』に度々登場する。 ○馬山

群馬県甘楽郡下仁田町大字馬山。 ○嘖 鳥賊が墨を嘖くニュアンス。「嘖墨將軍」は鳥賊の異名。

◎上平声十一眞

70 嘲秦里止酒 (秦里の酒を止むるを嘲る。)

癡情未便棄溫柔 癡情 未だ便ち溫柔を棄てず

只向醉鄉無所求 只だ醉郷に向て 求むる所無し

若使榴裙苦相勸 若し 榴裙をして苦ろに相勧めしめば

可能持戒不回頭 能く戒を持して頭を回さざるべけんや

ただ酔漢の国では酒を断ち、求めるものが無くなっただけで、みだらな感情でまだ温かく柔かい方は止めていないだろう。もし、紅のもすその美人に懇切丁寧に勧めさせたならば、はたして断酒の戒を守って振り向かないでいられるかどうか怪しいものだ。

○秦里 北原秦里。土佐藩士。勤番で江戸と土佐を何度も往復している。「松魚歌」で知られ『秦里詩稿』の著作がある。また、この「五山百絶」を含む『今四家絶句』の編集にも名を連ねている。天明五年(一七八五)文政十二年(一八二九)。 ○溫柔 秦里の「無題」詩に「溫柔郷裏身堪老、歌吹海中人欲仙」の一聯があり、五山はこれを意識している。

◎下平声十一尤

71 四月十九日陪南谷瀧公重遊玉川十絶句

(四月十九日、南谷瀧公に陪して重ねて玉川に遊ぶ。十絶句。)

昨将塵面洗清波 昨 塵面を將て 清波に洗ふ

慙愧重来塵故多 慙愧す 重来 塵 故らに多きを

一日纒温寒十日 一日 纒に温て 寒すこと十日

淙淙濺濺奈渠何 淙淙濺濺 渠を奈何せん

四月十九日、瀧川南谷公にお供して再び多摩川に出かけた。

絶句十首を作る。

昨年、世俗の塵で汚れた顔を清らかな波で洗ったのに、恥ずかしいのは再びやってきて塵が一段と多くなっていることだ。わずかに一日暖めても十日も冷やしっぱなしではもとの黙阿弥というが、いくらさらさらと清らかに流れる多摩川であつてそんな奴ばらをどうすることもできないだろう。

○南谷瀧公 46詩参照。 ○昨々重来 46詩の「四月二十七日陪南谷瀧公遊玉川途中得十絶句」をさす。 ○一日纒温寒十日 「一日、之を暴(あたた)めて、十日、之を寒(ひや)せば、未だ能く生ずる者有らざるなり」(孟子「告子上」)。一暴十寒。暴は仄字なので

平字の温にした。 ○淙淙濺濺 淙淙も濺濺も水の流れるさま、また音。 ○渠 かれ。 みぞを流れる泥水のイメージも重ねるか。

◎下平声五歌

72 その2

蘆沼截流寒玉廻 蘆沼 流を截りて 寒玉 廻る

銀刀無數暴髻肥 銀刀無數 髻肥を暴す

守魚老叟非生面 魚を守る老叟 生面に非ず

喚取慙慙分一杯 喚取して 慙慙に一杯を分つ

むしろで川の流れを分けて、水の玉がきらきらと飛び散り回る。銀色の刀のような魚が無数に鱗や顎を曝している。魚の番をしている老人は初めてみる顔ではなく、声をかけてねんごろに酒一杯を分けてやる。

○蘆沼 50詩にも。その楊萬里の用例にもあるように水の中でも用いる。 ○寒玉 美しい玉。清らかな水。 ○暴 暴の本字。

○髻肥 髻は魚の背鰭。肥は、あごおとがい。鰓の俗字。 ○非生

面「銜泥燕字非生面」(天民宅詠新燕・市河寛齋)

◎上平声十灰

73 その3

日氣驕人午似烘 日氣 人に驕て 午 烘るに似たり
不堪癡軟困濛濛 癡軟に堪えず 困 濛濛
霎時水枕試還好 霎時 水枕 試みるも還た好し
夢入山風溪谷中 夢は入る 山風溪谷の中

太陽の放つ熱気は人に傲るように昼ともなれば炙るような有様だ。

頭もおかしくなり体もぐったりし堪まらなくぼうつとして困り果てている。こんな時はしばらくの間、水を枕とする舟上の居眠りを試みるのもまたいいものだ。そして、夢で山風が吹き渡る溪谷の中で遊ぶのだ。

○水枕 船中の仮眠。「水枕能令山俯仰」(六月二十七日望湖樓醉書・蘇軾) ○山風 あるいは嵐気か。

◎上平声一東

74 その4

鷓鴣展翅立沙磯 鷓鴣 翅を展して 沙磯に立つ
一飽魚兒肚太肥 一たび魚兒に飽て 肚 太だ肥ゆ
舟近俄然背人去 舟 近くして 俄然として人に背て去る
波頭掠得劣能飛 波頭 掠め得て 劣に能く飛ぶ

鷺が翼を広げて水辺に立っている。どうやら魚を心行くまで食べたらしく腹がひどく膨れている。我々の舟の近くで急に人に背を向けて飛び去る。波頭を掠めて、なんとか飛び立ったようだ。

○鷓鴣 ろじ。鷺の一種。

◎上平声五微

75 池上邨夜歸(池上邨夜帰。)

纔穿林樾又田塍 纔に林樾りんえつを穿てば 又 田塍でんしょう
歸路蒼茫月未昇 歸路 蒼茫として 月 未だ昇らず
不信東南元是水 信ぜず 東南 元と是れ水なるを
星連平野即漁燈 星 平野に連れば 即ち漁灯

やっと林の木陰をくぐり抜けたかと思うと次は田の畦道だ。帰道はどこまでも模稜としているし、月もまだ昇らない。信じられないことだが、この東南はもともとは海であったのだ。そう言えば、星がこの広い野原につながってしまうとそれは全く漁り火のようだ。

○池上邨 東京都大田区池上と見られるが、詩意からその東南の川崎市川崎区池上町・池上新町をも含むか。 ○林樾 樾は樹陰。
○田塍 田のあぜ。田畑の畝。 ○蒼茫 限りなく広いこと。 ○東南元是水 川崎市川崎区池上町・池上新町は、江戸時代の池上新田。宝暦年間に干拓された。

◎下平声十蒸

76 遊仙詩嘲某

劉安今日遠離塵 劉安 今日 遠く塵を離る
百鍊金丹跡已陳 百鍊の金丹 跡 已に陳す
只趁雲中雞犬伴 只だ趁ふ 雲中 鶏犬の伴

當時賓客是閑人 当時の賓客は是れ閑人

淮南王劉安も今日では遠く人間世界から離れてしまった。百回も精錬して工夫した仙薬金丹であったが、その甲斐もなく全て跡形もなく古びてしまった。ただ雲の中まで追いかけて供をしてくれたのは鶏と犬だけで、当時たくさん養っていた食客はすべて役立たずだったのだ。

○劉安 前漢の高祖の孫。淮南王を継いだ。読書を好み、賓客や方術の士を招きこれら諸家の思想・学説を記述、編集した。その一部が現存の『淮南子』。 ○離塵 世俗と離れる。ここは昇天すること。

○陳 ふるびる。陳腐・新陳代謝などの陳。 ○雲中雞犬伴 「鶏犬皆仙」の故事。劉安が昇天した時、残した薬を舐めた鶏や犬も皆昇天したという(『神仙伝』)。 ○當時賓客 劉安の招いた方術などの食客。

○『五山堂詩話』 八34話に載せる。前文は、「一朝貴、有り。博く詞客を徵す、風雅を琢磨して、將に身を終んとするが如し。幾くも無くして、煙花、崇を為し、醜類を嘯引して、日々狎宴を事とす。余、遊仙詩を作りて之を諷す。」である。明確に寓意のある作品だが、詳細は不明である。

○『文政十七家絶句』(34才)にも収録。
○上平声十一眞

77 中元見月

一年真没賽中元 一年 真に中元に賽まさるは没なし
飽領清光坐靜軒 飽くまで清光を領して 靜軒に坐す
却是家家少人賞 却是是れ 家家 人の賞すること少まなり
照冥門炬送蘭盆 冥を照して 門炬 蘭盆を送る

一年のうち真に中元の月に勝るものはない。こころゆくまで清らかな月光を静かな軒端に座って味わっている。しかし、この景を世間の家々の人で觀賞するものは稀だ。門々では灯籠や篝火でせつかくの闇夜を照して、盂蘭盆会の送り火としている。

○賽 勝負に勝って誇ること。勝負を争うこと。 ○中元 日本では盂蘭盆と習合してお盆の行事となる。七月十五日。 ○蘭盆 盂蘭盆会。

○『五山堂詩話』 卷八に詩の解説があり、盂蘭盆会の送り火に関して「稍や殺風景を覚ゆ。」と述べている。本文、異同有り。第二句「飽領清光坐靜軒」を「独領清光坐小軒」とする。
○上平声十三元

78 荷葉露 花水十詠之一

荷葉晶瑩無處無 荷葉 晶瑩 処として無きこと無し
化兒何更着工夫 化兒 何んぞ更に工夫を着かん

微風揺手還多事 微風 手を揺す 還て多事
故碎大珠成細珠 故らに大珠を碎て 細珠と成す

蓮の葉は露に濡れて、きらきらと輝かないところとてない。それで十分に美しいのだが、そこは自然を作った造化小児、どうして更に工夫をしないでおこうか。微風を吹かして、ご苦労なことにかえつて仕事を増やして手で揺らしている。わざわざ大きな珠を砕いてより美しく細かい珠としているのだ。

○晶瑩 ひかり輝くさま。光明のさま。 ○無處無 無處不。処としてせざる無し。 ○化兒 造化小児。造化の神を指して小児という。唐・杜審言の故事。「杜審言疾甚、宋之問等省候、答曰、甚為造化小兒所苦。」(唐書・文芸伝) ○揺手 手をゆり動かす。手を振る。 ○多事 仕事が多い。余計なことをする。 ○上平声七虞。

79 芭蕉雨 同上

雨與芭蕉有底仇 雨と芭蕉と 底の仇か有らん
通宵彈擊未曾休 通宵 彈擊して 未だ曾て休まず
此冤明曉將牋訴 此の冤 明曉 牋を將て訴へんとす
一卷心書碧已抽 一卷の心書 碧 已に抽んず

雨と芭蕉とはどのような仇同士なのであるか。一晚中、芭蕉の葉を打ち続けてけつして休もうとしない。芭蕉はこの冤罪を明朝に紙に書いて訴えようとしている。一卷の心を訴える書は緑色の葉として既に出てきている。

○將牋訴 底本の訓点では、「將に牋訴せんとす」。文意から読み換えた。 ○心書 詩の用例の見つからない語。芭蕉の葉を訴状と見立てた。

◎下平声十一尤

80 十三夜賞月

芋栗堆盤也足歡 芋栗 盤に堆して 也た歡ごぶに足る
茅堂把酒弄冰丸 茅堂 酒を把て 氷丸を弄す
今秋有閏猶餘熱 今秋 閏有り 猶ほ熱を余す
後月恰同前月看 後月 恰も前月の看に同じ

里芋や栗を大皿に高く積んで、それだけで十分喜ばしい。茅葺きの粗末な家で酒杯を手にして、氷のような澄んだ明月を味わっている。今年には閏月があるので秋の九月といってもまだ夏の暑さが残っている。十三夜の後の月と言っても、あたかも先月見た中秋十五夜の月と同じように見える。

○氷丸 用例の見えない語。水輪などと同じく冴えた光の月を指す。

○今秋有閏猶餘熱 「今秋」は、「有閏」ではなく、「猶餘熱」にかかる。

○後月 後の月。九月十三日の月。粟名月、豆名月。日本特有の風習。

清新性靈派の詩人はこうした漢詩的ではない素材を好んで取り上げた。○前月 中秋、八月十五日の月。芋名月。

◎閏月(一三ヶ月め)がある年は、全体として前年より前倒しして季節がめぐる。ただし、閏月を入れた月以降は元にもどってしまいうので、この場合、九月以降に閏月があった年ということになる。そうすると九月でも暑い時期となる。こは、十一月に閏月があった文化十年の九月十三夜ということになろう。

◎上平声十四寒

81 嘲菊

麗衰金紫慕何深 麗衰 金紫 慕ふこと何ぞ深きや
 殘蕊抱枝愁不禁 殘蕊 枝を抱て 愁 禁へず
 五斗抽身真勇決 五斗 身を抽んづ 真に勇決
 菊花却負老陶心 菊花 却て老陶の心に負く

乱れ衰えた黄色や紫の菊がこの世を慕うこと何と深いのだろうか。すがれ残った花となつても未練深く枝にしがみつこうに離れずについて、愁いを感じずにはいられない。陶淵明が五斗米の為に腰を折らずと言つて、身を世間から隠したのは本当に勇氣ある決断であつ

た。その陶淵明が愛した菊花だというのに逆に老陶淵明の心に背いているではないか。

○麗衰 麗は麗の俗字。みだれる。あるいは麗の誤字か。○蕊はな、しべ。55詩参照。○五斗 五斗米。俚令の俸禄である五斗の扶持米。薄給。「我不能為五斗米折腰」(晋書・隱逸・陶潛) ○菊花 陶淵明は菊を愛したことで知られる。「採菊東籬下、悠然見南山」(飲酒其五・陶潛)、「晋陶淵明獨愛菊」(愛蓮說・周敦頤) などに見える。◎下平声十二侵

82 送佐原生

銅碗龍吟日憂鳴 銅碗 龍吟 日々に 憂鳴す
 百人不及一人清 百人は一人の清に及ばず
 一人今去真堪恨 一人 今 去る 真に恨むるに堪ゆ
 自是不聞金石聲 是より聞かず 金石の声

日々、銅の碗を鳴らして龍が吟ずるような立派な詩を吟じていた。百人かかっても貴方一人の清らかさに及ばなかった。だから、その一人が今去つて行くというのは本当に恨むべき残念事である。これからはあの金石の音のように美しい君の詩を吟ずる声を聞くことはないのだ。

○佐原生 佐原鞠場（売花翁？）か。45詩参照。○銅椀龍吟ゝ憂
鳴「憂銅椀為龍吟歌」（唐・皎然）○金石聲 詩文の格調の優れて
いるの言う。

◎『文政十七家絶句』34オにも収録する。詩句に異同なし。

◎下平声八庚

83 霜夜望月

青女素娥粧正酣 青女素娥 粧 正に酣なり
夜深照影落寒潭 夜 深くして 影を照して 寒潭に落つ
家家檐角挂冰柱 家家の檐角 氷柱を挂く
知是抛来幾玉簪 知る 是れ抛ち来る 幾玉簪

霜の神女である青女と月の仙女素娥が盛んに化粧をしているよう
だ。夜も更けて月明かりは輝やき、霜気は冷たい淵に落ちていくよ
うだ。家々の軒先には氷柱がかかっている。わかった、これは彼女
たちが天から投げ捨てた幾つもの玉の簪なのだ。

○青女 霜の神。○素娥 月宮の仙女。色白なので素という。嫦娥、
姮娥。○寒潭 水の冷たい淵。○氷柱 つらら。

84 元旦戲述

索債拜年嘖喜相 索債 拜年 嘖喜の相
両般只越一宵移 両般 只だ一宵を越て移る
夜叉已革獐獐面 夜叉 已に革む 獐獐の面
門口来低菩薩眉 門口 来て低る 菩薩の眉

借金の催促の時は怖い顔で、新年の挨拶にくる時の顔はめでたい
顔だ。この二つの表情はたったの一晚で入れ替わる。夜叉は既に獐
猛な顔を改めて、門口に来てつり上げた眉を菩薩のごとく下げてい
る。

○索債 借金取。○拜年 新年を祝う挨拶をする。○両般 般
はたぐい、種類。一般、百般など。○獐獐 そうどう。荒々しく
憎らしい恐ろしい容貌。○菩薩眉
◎嘖と喜を両般で受け、両般と二宵を對比させる。更に両般を夜叉
と菩薩に展開している。
◎上平声四支。起句は踏み落とし。

85 竹裏梅

青士當春迎窈窕 青士 春に當て 窈窕を迎ふ
明珠萬斛聘來時 明珠万斛 聘し来る時
嬋娟却恐人覘面 嬋娟 却て恐る 人の面を覘んことを
翠帳深籠不使知 翠帳 深く籠て 知らしめず

竹の中の梅

青々とした竹は春になって美しい妃を迎えた。莫大な宝物で娶った時のこと。そのあでやかさを誇るどころか、逆に他人がその顔をぬすみ見るのを心配している。竹林の緑の帳で深く閉じこめて人に知られないようにしているのだ。

○青士 竹をいう。「岸幘尋青士」(晩到東園・陸游) ○祭妃 用例の見つからない語。祭は、白米。みめよいこと。祭者は美人。○明珠 ひかる玉、宝玉。○聘 めとる。仲人を立て贈り物をして正式に妻とすること。この明珠萬斛は贈り物を指すか。○嬋娟 あでやかで美しいこと。○覘 うかがう。ぬすみみる。○上平声四支、妃は五微の通韻。

86 桃花圖

人世百年彈指空 人世百年 彈指 空し
白頭又是對春風 白頭 又是是れ 春風に對す
漁郎仙去劉老死 漁郎は仙し去り 劉老は死す
只有桃花依舊紅 只だ桃花の旧に依て紅なる有り

人生長くても百年、指を弾くわずかな間に過ぎてなくなってしまう。桃のような紅顔の少年も白髪頭でまた春風に吹かれることになった。桃源郷に迷い込んだという漁師はとつくにこの世を去り、桃を

小人に喩えた劉禹錫も亡くなった。今はただ桃花の紅だけが昔と同じように紅のままにある。

○人世百年 人の一生は百年と認識された。日本の人生五十年。○彈指 指をはじく極めてわずかな時間。○漁郎 「桃花源記」(陶淵明)に見える武陵の漁人。桃花の林の中のユートピアに迷い込んだ。○仙去 仙人になって俗界を去ることだがここは死去すること。仙遊、仙逝。○劉老 劉禹錫。小人を桃の花に喩えた詩を作り左遷される。召還された時に既に桃はなく再び詩を作る。「紫陌紅塵拂面來、無人不道看花回。玄都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽。」(自朗州至京戲贈看花諸君・劉禹錫)、「百畝庭中半是苔、桃花淨盡菜花開。種桃道士今何歸、前度劉郎今又來。」(再遊玄都觀・劉禹錫)などに見える。

◎上平声一東

87 折花仕女圖

恐被東風吹作塵 恐らくは東風に吹かれて塵と作されんことを
一枝折取苦留春 一枝 折取して 苦に春を留む
宮中亦有天台恨 宮中も亦た天台の恨み有り
自別劉郎不見人 劉郎に別れてより人を見ず

花が春風に吹かれて塵となってしまうことを心配しているだろう。

一枝を折り取って丁寧に春を留めようとしている。天台山と言えは再び訪ねることができなくなった劉晨が有名だが、天台の宮中のほうからもまた恨みがあるのだ。劉郎と別れてしまつてからというもの人を見かけなくなつてしまつた。

○仕女 つかじめ、官女、美女。○苦 はなはだ。「ネンゴロ」〔詩家推敲〕下八才) ○天台と劉郎 後漢の劉晨と阮肇が天台山に入つて仙女と遇い、半年ほど夫婦暮しをした後、家に帰つてみると、すでに十世を経て世の中がすっかり變つていたという故事(「幽明録」)。
◎上平声十一眞

88 瑞聖寺園中所見

櫻花弄態粉紅蘭 櫻花 態を弄して 粉紅 蘭なり
嫋嫋垂絲春作團 嫋嫋の垂糸 春 団を作す
却是辛夷誇玉潔 却是是れ 辛夷 玉潔を誇る
巖然不許蝶蜂干 巖然として許さず 蝶蜂の干すを

桜の花は嬌態を弄して紅粉を塗りたくつて正に咲き誇つている。風に揺れるたおやかに垂れた細い糸のような枝に花が塊となつている。逆に辛夷の花は玉のような潔癖さを誇つている。高く抜きんで蝶や蜂などはけつして寄せ付けないのだ。

○瑞聖寺 ブイシヨウジ。東京都港区白金台の禪寺。『江戸名所図会』に詳しい。しだれ桜やコブシがあるかは不明。○辛夷 コブシ。通常は紫木蓮のこと。白いコブシは漢語で辛夷とは言わない。○巖然 高く抜きんでる。○干 おかす。
◎上平声十四寒

89 美人觀牡丹圖

朵朵錦雲春欲融 朵朵の錦雲 春 融せんと欲す
多情獨自嬌紅 多情 獨自 嬌紅を惜む
沈香亭畔他時恨 沈香亭畔 他時の恨
吹落漁陽一夜風 吹き落つ 漁陽一夜の風

枝ごとの牡丹の花が錦の雲のようで春も和らいでいる。美人は感じやすい心で独り艶やかな牡丹の紅を惜んでいる。牡丹に喩えられる楊貴妃の沈香亭のあの時の恨みの心はいかばかりか。漁陽から起こつた反乱の風で美人も牡丹も一夜にして吹き落とされてしまったのだ。

○染 花のついた枝。花のひとつかたまり。○融 やわらぐ。和。
○沈香亭 長安の宮殿興慶宮の中の亭。沈香木で作られる。牡丹の名所で玄宗と楊貴妃が見をした。それを李白が詩に詠み、李龜年が歌つた。「名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看。解釋春風無限恨、沈

香亭北倚闌干。」(清平調 其三・李白) ○他時恨 沈香亭で牡丹を見ていた楊貴妃が安禄山の拳兵で一夜にして露と消えた恨み。○漁陽 幽州の地名。天宝十四年、安禄山十四万が拳兵。「漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生、千乘萬騎西南行。」(長恨歌・白樂天)

◎上平声一東

90 題蜀山人真

蘸甲淋漓酒滿鍾 蘸甲 淋漓 酒 鍾に満つ
 醉毫一掃萬牋空 醉毫一掃 万牋 空し
 人間多少炎涼事 人間 多少 炎涼の事
 不到玉山頽夢中 玉山 頽夢の中に到らず

なみなみとついで酒がしたたるようで、酒は壺に満ちている。酔って筆を一払いすれば一万枚の詩牋も瞬く間に書き尽くしてしまう。多くの世俗的な盛衰の事など、玉山が頽れるがとき酔いつぶりのこの人の夢の中にはやってこないのだ。

○蜀山人 大田南畝。文人。戯作者。寛延二年(一七四九) 文政六年(一八二三) 没。○真 肖像画。○蘸甲 なみなみとついで酒。杯を持つと指甲をひたすから。蘸は、ひたす。○淋漓 したたるさま。○鍾 さかつぽ。○人間 この句は和漢異義語三

つ並んでいる。○多少 多いと少ない。多い。○炎涼 あつい、すずしい。転じて、世態の榮枯盛衰、富と貧。○玉山頽 容姿のすぐれた人が甚だしく酒に酔ったさま。

◎上平声一東、鍾は二冬の通韻。

91 百合花

花壇結陣互相依 花壇 陣を結びて 互に相依る
 百合偏能敵暑威 百合 偏に能く 暑威に敵す
 奇警一攻非下策 奇警の一攻 下策に非ず
 曉風齊放佛郎機 曉風 斉しく放つ 仏郎機

花壇の中で陣列を組んで並び、百合はよく暑さに対抗して戦っている。するどい攻撃で、悪い作戦ではない。朝の風の中で、そろって鉄砲を放つのだ。

○百合 ゆり。その根茎の鱗片が多数結合しているのという。○結陣 陣営をたてる。○奇警 すぐれてかしこい。○下策 上策の逆。下手なばかりごと。○佛郎機 フランキ。フランク族から伝来した鉄砲。
 ◎つまりは、鉄砲百合のこと。あるいはそこから発想したか。
 ◎上平声五微

92 晩秋雜詠 原六

漁梁敗落夕陽餘 漁梁 敗落して 夕陽 余る
一道寒流玉似梳 一道の寒流 玉 梳るに似たり
無頼溪風錯人眼 無頼の溪風 人眼を錯まらしむ
挂来楓葉做紅魚 楓葉を挂け来て 紅魚と做す

夕日の名残の中で川瀬の梁が壊れかかっている、一筋の冷たい川の流れがまるで玉が櫛を通るようだ。気がきかないことに谷川を渡る風が人の目を錯覚させる。紅葉を川面に落として紅い魚と見まがわせるのだ。

○晩秋雜詠 范成大の田園雜興の影響か。97・98「冬日雜詠」がある。

○漁梁敗落 起句は「漁梁 敗落す 夕陽の餘」と訓むのが通常だが原本の送り仮名を生かした。○敗落 敗はやぶる、落はおとろえる。零落など。○寒流 冬の川。冷たい水流。○挂 掛と同じ。○做 なす。行う、作る。もと作の俗字。○紅魚 赤い色の魚。鯛の別名。こは鮭か、鮎か。

◎上平声六魚。

93 その2

衰颯芭蕉爭耐秋 衰颯して 芭蕉 争でか秋に耐えん
幾株芟盡不曾留 幾株か芟り尽くして 曾て留めず

猶能一寸存生意 猶ほ能く 一寸 生意を存す
已剪燭心青又抽 已に剪る 燭心 青 又 抽んず

衰えしおれた芭蕉の葉がどうして秋の時期まで耐えていられようか。幾株かを伐り尽くして全く痕を留めていない。それでもなおわずかに一寸ばかり生の気があるようだ。既に剪った灯芯のようなところから青い芽がまた出てきている。

○衰颯 おとろえしおれる。颯もおとろえる意。○一寸 一尺の十分の一。短い、わずかな、少し。○燭心 灯の芯。
◎下平声十一尤

94 その3

晚茄結子自支持 晚茄 子を結んで 自ら支持す
小小顆珠懸在枝 小小の顆珠 懸て枝に在り
摘得鹽収香味別 摘み得て 塩収 香味 別なり
也勝首夏上番時 也た首夏上番の時に勝れり

晩秋の所謂秋茄子が実を結んで自ら支えてぶらさげている。小さなその玉のような実は枝にかかっている。摘んで漬け物にするその香味は格別だ。そして初夏の初物の収穫時期に勝っている。

○晚茄 秋茄子。秋の末になるナス。小粒で実がしまり甘みがある。古くから美味で知られる。 ○鹽収 しおつけ。しおびき。 ○首夏 初夏。 ○上番 第一番。早や摘み。 ○上平声四支。起句は下二字が同韻目。

95 その4

蕎麥秋香新上盤 蕎麥 秋 香しうして 新に盤に上る
細糸垂筋翠闌干 細糸 筋に垂れて 翠 闌干
老饑真箇可無肉 老饑 真箇に肉無かるべし
三百六十齋不難 三百六十 齋すること難からず

蕎麥も秋になると香しい新蕎麥として皿に載せられる。細い麵が筋のように垂れ、緑がかつた色が入り乱れている。老いて食をむさぼる時、本当に肉味が無いほうがよいのだ。この蕎麥があれば一年三百六十日精進潔齋するのも簡単だ。

○闌干 入り乱れること。 ○老饑 年老いて食をむさぼること。 ○真箇 箇は語助の詞。 ○齋 精進潔齋。ものいみ。飲食や行いを慎んで心身を清らかにすること。 ○上平声十四寒。

96 重陽不見菊

寂寞東籬不見花 寂寞たる東籬 花を見ず
一杯酬節賞心差 一杯 節に酬て 賞心 差ふ
爛開他日恨遲暮 爛開 他日 遲暮を恨む
恰似黄金老滿家 恰も似たり 黄金 老て家に満つるに

今年は物寂しい東籬で菊の花が全然咲かない。一杯の酒で重陽節に酬いようと思ったが、愛でるべき菊がなく、あてがはずれた。いずれ近いうち咲き乱れるのだから、その遅すぎるのが恨みだ。まるで年とってから黄金が家中に満ち満ちるようなもの。

○重陽不見菊 重陽は九月九日。菊の節句。菊がないのは閏月と関係か。80「今秋有閏」、100などが季節のずれをモチーフ。 ○東籬 「採菊東籬下、悠然見南山」(飲酒其五・陶淵明)から古来、菊のあるべき場所。 ○一杯 酒と菊は陶淵明の縁語。 ○差 酒はあるが菊がないので、食い違ふこと。あてがはずれる。 ○爛開 咲き乱れる。爛漫として開く。「爛開梔子渾如雪」(初秋行圃四首・楊萬里) ○他日 過去または将来。 ○遲暮 だんだん年を取る。ゆっくり遅いこと。 ○恰似黄金老滿家 ことわざなどか。 ○下平声六麻

97 冬日雜詠 原四

滿階風葉走乾紅 滿階の風葉 乾紅を走らす

人坐冬陰黯澹中 人は坐す 冬陰 黯澹の中
輕霰纔來不成雪 輕霰 纔に來りて 雪を成さず
乍看日影掠窗櫺 乍ち看る 日影 窗櫺を掠むるを

きざはしいっぱいの枯葉が風に吹かれて乾いた紅色を走らせる。
人は冬の日陰のうす暗い中に座っている。わずかに少しの霰が降つてきたが雪になるほどではなく、ふと見れば陽光が格子窓を掠めて射している。

○冬日雜詠 閑連の詩題に、67冬日田園雜興、92〜95晚秋雜詠がある。○風葉 風に吹き散らされる木の葉。○乾紅 紅葉の落ち葉。
○黯澹 うす暗くて深い。○櫺 おり。れんじまど。
◎上平声一東。

98 その2
雪裏河豚恰及時 雪裏の河豚 恰も時に及ぶ
買來猶恨入庖遲 買ひ來て 猶ほ恨む 庖に入るの遲きを
人間珍珠應無比 人間の珍珠 応に比無からべし
却是朱門不許知 却是是れ 朱門 知ることを許さず

雪が降る中、ちょうど河豚がもっとも美味いという時になった。
もう買い求めて来たのにまだ調理場へ入れるのが遅いなどと文句を

言っている。世間に珍珠がいろいろあるといってもこれは他に比類がないだろう。こんな美味しいものが高位高官は逆に知ることができないのだ。

○雪裏河豚恰及時 日本では河豚の旬は秋の彼岸から春の彼岸と言われ、冬のものである。中国では必ずしもそうではなく、「竹外桃花三两枝、春江水暖鴨先知。蒹葭滿地蘆芽短、正是河豚欲上時。」（惠崇春江晚景・蘇軾）など。季節は異なるがこうした典拠を背景にした表現。素堂の「目には青葉山ほととぎす初鱈」なども似た世界。
○庖 ホウ。くりや。○朱門 朱塗りの門。転じて高位高官のやしき。
◎下平声四支

99 霜月早行
人跡板橋霜是月 人跡板橋 霜 是れ月
雞聲茅店月仍霜 雞聲茅店 月 仍ほ霜
不知霜月元何意 知らず 霜月 元と何の意ぞ
只作清寒逼客裝 只だ清寒を作して 客裝に逼る

鄙びた板の橋の霜に付いた人の踏み跡を月が照らし、粗末な茅店から鶏の声が聞こえるが月はなお霜気を帯びている。霜や月がもともどどういう気持ちか知らないが、早立ちの旅人にとつてはとにかく

くただ清らかな寒さとなつて旅支度に迫ってくるのだ。

のど。○串珠 梅の木に雪の積もった様子。枝の串が雪の珠を貫く様。所謂クシにあてるのは和語。串は貫く意。○積陰 つもり

つもった陰気。寒気。ひさしく続く曇り日。

○上平声一東

○人跡板橋霜（温庭筠の五言句をそのまま七言句の上五字にもつてくる機知。「雞聲茅店月、人跡板橋霜。」（商山早行・温庭筠）○板橋 ひなびた橋。中国では普通、橋は石橋なのに対して言う。

○霜月 霜の降りる夜に出る月。陰曆七月の別名。

○下平声七陽。起句「月」は踏み落とす。

100 雪裏聞鶯

雪鎖梅花料峭風 雪は梅花を鎖す 料峭の風

澀喉不似串珠工 澀喉は串珠（串珠）の工なるに似ず

積陰今歳春如此 積陰 今歳 春 此の如し

将謂城中此谷中 将に謂んとす 城中 此れ谷中と

春風と言っても冷たい風が吹き、梅花は雪に埋もれている。まだ鳴きなれぬ鶯の喉では、雪の珠を串刺しにしたような巧みさにはかなわない。今年（今歳）は春と言っても寒気が積もり積もってこんな具合だ。街中で溪谷の趣が味わえると言っておこう。

○料峭 春風の寒い形容。料は撫でふれる、峭はきびしい。この季節のずれのモチーフも関係か。春寒は常套的なテーマである。

○澀喉 渋る喉。鶯の鳴き方がまだ上達していないこと。喉はコウ、